

# 半井家本『医心方』紙背文書と国司の交替

森 公章

はじめに

表題の文書群は十二世紀前半の国衙機構の諸相を窺わせる史料として著名であり、特に大治二年（一一二七）正月十九日任の加賀守藤原家成が国衙に注進を命じた目録と考えられる「国務雜事」は八十九項目に亘るもので、当該期の国務運営に関わる留意点や国内諸勢力の動向を知る材料として興味深い。私は在庁官人制の成立過程や受領郎等などの活動を通じた受領による国衙機構構築のあり方を検討し、全国的な在庁官人の一覧表を作成して、いくつかの国については在庁官人や武士の動向を考究してきたが、知行国制下の様相や国守側からの国司交替に伴う行事の詳細に関しては考察不十分のところが大きい。<sup>(2)</sup>

そこで、小稿ではそうした側面について探究可能な素材として、本文書群を用いて具体相の解明を試みたいと思う。本文書群は年代順に整理すると、近江、加賀、越中の国務に関する文書が含まれており、全体像は表1の如くである。文書群の性格、伝来理由については既に優れた考察が行われており、当該期の国衙支配に関わる諸問題を論じた研究も進められている。<sup>(3)</sup>ここではそれらの驥尾に付いて文書群の概要を説明した上で、私なりに関心を持った事柄について、

表1 半井家本『医心方』紙背文書国別目録

〔近江国〕

- 【9】25-12・13保安3（1122）・3・35近江国司庁宣…大介藤原朝臣〈実光〉（花押）→愛智郡追収納使／「可令早召具参上郡司成行身事」《平1962》
- 【34】25-43・44保安4・6・25近江国司庁宣…大介藤原朝臣〈実光〉（花押）→府院行事所／「仰下条々事」…橋・渡船・女騎馬20疋等5箇条
- 【2】25-2保安4・6・28近江国司庁宣…右中弁兼大介藤原朝臣〈実光〉（花押）→府院駅家行事所／「可早任院宣以御使檢非違使府生行友且令催勤駅家雑事且停止勢多神人事」
- 【1】25-1保安4・7・7祝部惟直解…散位祝部惟直→（欠）／「進上勢多橋為□〔渡カ〕船事」@戸田氏は「日吉社司送状」とする

〔加賀国〕

- 【17】25-23・24（年未詳）3・15散位藤原某書状…散位藤（花押）状→謹上加賀御目代殿／江沼郡勸農使飛驒前司（藤原景実）下向の事、庁宣請文の督促等
- 【25】25-34（年月日未詳）散位藤原某書状…（欠）→（欠）／稚海藻供御綱丁の事、近松保事等
- 【3】25-3（年未詳）3・17馬允平某書状…馬允平（花押）→〔 〕／庁宣1通を進上し、郷中沙汰を依頼
- 【26】25-35（年未詳）3・23散位藤原某書状…散位藤（花押）状→（欠）／断簡、「許否□事等又」云々
- 【6】25-6・7（年未詳）4・6散位藤原某書状…散位藤原（花押）→謹謹上御目代殿（□□中）／芹田郷（加賀郡）を大盤所乳母尾張局（高階為遠女、白川院尾張）預りとし、これを遠江殿（為遠の兄為章の子宗章）に沙汰せしめるために庁宣を下知する旨を通知
- 【23】25-31・32（年未詳）4・11散位藤原某書状…散位藤（花押）状→謹上御目代殿／度々書状に対する報状が未到の旨を伝え、専使派遣。所知につき沙汰人等派遣の時機を問い、使者の任務完遂に援助を乞う
- 【19】25-26（年未詳）5・10散位藤原某書状…散位藤（花押）状→謹上御目代殿／供御夫領の下遣を通知。甘葛煎の未進を問う
- 【18】25-25（年月日未詳）散位藤原某書状…（欠）→（欠）／弁済料の非法につき、国衙よりの督促を依頼 @25-26の礼紙か
- 【12】25-16・17（年未詳）5・20散位藤原某書状…散位藤（花押）状→謹上御目代殿／使者の上洛を促し、所知等の後見や勸農について指示。「都鄙事、相互可令申之由」を伝達
- 【13】25-18（年未詳）5・25散位藤原某書状…散位藤原（花押）状→謹々上御目代殿／白江保（能美郡）司職・弓木目代の補任により留守所符発給を指示
- 【33】25-42（年月日未詳）散位藤原某書状…（欠）→（欠）／5/20～28の度々解状事、番役人（国舍人）等事、供御夫領書生秋忠事、糸・綿事を伝達
- 【20】25-27・28（年未詳）6・7散位藤原某書状…散位藤（花押）状→（欠）／5/25・26の書状受領。興保（加賀郡）司代下向、起請田本数、額田御庄（江沼郡）檢注等の通知
- 【32】25-41（年未詳）6・9皇后宮権大進某書状…皇后宮〈令子内親王〉権大進（花押）状→御目代殿／断簡、「謹言」
- 【44】29-20・21・22（年未詳）6・26散位藤原某書状…散位藤（花押）状→（欠）／興保は国除目で御乳母（尾張局）に給預し、勝載所や益富保（石川郡）の庁宣とともに下行した旨を伝達。額田庄実檢が終了。大江行重任国下向の料馬を求

む。「重啓」として雑色相武の下着の有無、所知の糸・綿の申付不審、得分事などを伝える

- 【15】 25-21 (年未詳) 7・29右衛門尉橘某書状…右衛門尉橘(花押)→謹々上賀御目代殿／播磨守殿(藤原家保=加賀国の知行国主)が私物沙汰のため雑色長延国を遣すので、往反の便宜を依頼
- 【5】 25-5 (年未詳) 8・7散位藤原某定文…(花押)→(欠)／「糸・綿斤納事」以下10項目の国務の条々を指示
- 【31】 25-40 (年未詳) 8・18散位藤原某書状…散位藤(花押)状→謹上御目代殿／断簡、「帰下之条、尤不便也」云々
- 【16】 25-22 (大治2カ)・8・22某国宣…散位藤(花押)状→謹奉御目代殿／運米300石(高野詣に関連か)の沙汰のため恪勤侍季房を派遣
- 【48】 29-27 (年未詳) 8・22散位藤原某書状…散位藤(草名)状→謹上御目代殿／山下郷(能美郡)申文を示し、その実情を問う
- 【46】 29-24・25 (大治2カ)・8・26某国言…散位藤(花押)状→謹上御目代殿／高野詣料を早米で急ぎ進上すべき旨を指示。信兼朝臣の私装束賜与を依頼
- 【35】 25-45・46大治2(1127)・8・28額田庄寄人等解…案主大江経定他10名→(加賀守藤原家成カ)／前預所相模前司(源有兼)の非例を訴える《平2107》@端裏書「不用也」とある
- 【37】 25-50・51大治2・8加賀国江沼郡諸司等解…前掾大江他4名→(加賀守藤原家成)／諸司等京上して国裁を請わんとす
- 【49】 29-28 (年未詳) 9・5散位藤原某書状…散位藤(花押)状→謹上善大夫殿／断簡、不審の条々を問い、早米の運上を催促 @ 【46】
- 【22】 25-30 (年月日未詳) 親賢奉書礼紙書…親賢奉→(欠)／国侍・国雑色・国舎人の交名注進を指示 @ 【33】
- 【24】 25-33 (年月日未詳) 散位藤原某書状…(欠)→(欠)／断簡、弁済使・納所使の下向、小川津(石川郡)給を充つべきことを伝達
- 【29】 25-38 (年月日未詳) 散位藤原某書状…(欠)→(欠)／断簡、所知の沙汰人派遣の遅延を報じ、後見沙汰を乞う @ 【23】・【12】
- 【30】 25-39 (年月日未詳) 某定文覚…(欠)→(欠)／「勸乃事」古作田600町不作の理由は前司が郎等を田堵とし、この京下人千余人が在序官人らの命に従わないこと云々
- 【36】 25-47・48・49 (年月日未詳) 雑事注文…(欠)→(欠)／89項目の「国務雑事」
- 【41】 25-56 (年月日未詳) 某書状…(欠)→(欠)／石清水八幡宮別当法印の要請により播磨殿(藤原家保)が権寺主増清を当国諸寺別に補任
- 【27】 25-36 (年月日未詳) 某書状…(欠)→(欠)／断簡、「僧正御房可被申合」云々 @僧正御房は仁実で、閑院流。待賢門院・前任国守季成の兄  
「越中国」
- 【8】 25-10・11 (年未詳) 9・19祢宜祝部某書状…祢宜祝部(花押)→謹々上越中御目代殿／当社(日吉社カ)神人は諸国に倣い越中でも在家公事を免除されており、新任国司の藍役賦課は不本意
- 【47】 29-26大治4(1129)・10・15越中国序宣…右兵衛佐兼守藤原朝臣(公能)(花押)→留守所／右馬允平助永を貢蘇使に定遣
- 【42】 25-57・58 (年未詳) 12・18散位藤原某書状…散位藤原(花押)状→進上越中御目代殿／在所山法師らが罷り越したら「国兵士」を伴って加賀境まで送って欲しい旨、女を勾引した恒貞丸の件などを伝達
- 【45】 29-23 (年月日未詳) 散位藤原某書状…(欠)→(欠)／恒貞丸妻などの件を伝

- 達 @【42】と同筆
- 【38】 25-52・53（大治4カ）・12・29出羽守伊岐致遠書状…出羽守〈伊岐致遠〉（花押）  
 状→謹上御目代殿／急々の相博を氣遣い、越中国弘田（新川郡）・東八千（射水郡）  
 保の官物農料沙汰と免田開田の後見を申請
- 【21】 25-29（年未詳）1・10大舍人助某書状…大舍人助（花押）→御目代殿／序宣米  
 の下行を依頼
- 【14】 25-19・20（大治5カ）・1・30散位某書状…散位〈大江守則カ〉（花押）→進上  
 越中御目代殿／加賀・越中両国の守相博をめぐる状況。目代の留任を祝う
- 【10】 25-14（年未詳）2・10大蔵大輔某奉書…大蔵大輔（花押）奉→謹上善大夫殿／  
 左兵衛督殿（藤原実能＝越中国の前知行国主）の申し入れにより、前使が抑留  
 した去年公物・郷保沙汰人得分の免上を指示
- 【11】 25-15（年月日未詳）某書状礼紙書…（欠）→（欠）／「国中」云々 @【10】と  
 同筆
- 【7】 25-8・9（大治5カ）・3・7白山中宮執行大法師某書状…中宮執行大法師（花  
 押）→進上越中御目代殿／白山中宮は去年末失火により神事料物等を焼失、神  
 事用途懈怠のため能米（「都幡津米」）の借用を乞う
- 〔未詳〕
- 【4】 25-4（年月日未詳）某書状礼紙書…（欠）→（欠）／京上の許可と使者の上洛・  
 下着の日程を奉ずる
- 【28】 25-37（年月日未詳）某書状…（欠）→（欠）／断簡、「承」云々
- 【39】 25-54（年月日未詳）某書状…（欠）→（欠）／断簡、「抑或人自遠所如此令申候」  
 云々
- 【40】 25-55（年月日未詳）某書状…（欠）→（欠）／断簡、「年首御慶賀感悦」云々
- 【43】 29-1～19長承1（1132）・11・1長承2年具注曆…正月～12月完存
- （備考）冒頭の番号は本文書群全体の文書番号を示す。25-12・13は半井家本『医心方』  
 第25巻紙背の紙数を示す。推定年次を含めて、各国別に年月日順に並べ、文書  
 名を記した。○→○は差出所→充所を示し、次に内容その他を略述した。平＝  
 平安遺文。

当該期の国務運営の様相や国衙機構のあり方をめぐる事象に論及してみたい。

本文書群は半井家本『医心方』第二十五巻・二十九巻の紙背文書として伝来したもので、ここでは全四九号の文書を国別、かつそれぞれの国毎で年月日順（推定を含む）に配列して示した。表1によると、近江・加賀・越中三国に関わる文書がこの順番で残っており、未詳としたものもいづれかに属すると思われる。とすると、本文書群はこの三国の国務に携わった人物のもとに集積されたものと目され、加賀・越中では目代宛の文書が散見しているので、大治二年正月十九日に加賀守となった藤原家成（父家保が知行国主）の目代として国司任初の業務に関与し、その後既然大治元年から越中守であった藤原公能（父実能が知行

国主)の目代、同四年十二月十三・二十九日の除目における知行国相博を経て越中守となつた藤原顕長(兄顯頼が知行国主)の下でも引き続いて目代を勤めた者が浮上してくる。【49】・【10】に見える「善大夫」は三善某がその人物に比定され、前者では加賀守の任初の用務が終了して目代を改替されていたため、後者では越中守の交替に伴い、一時的に目代不在の間隙時であつたために、目代の肩書ではなく、「善大夫」宛の文書ながら、当該国に關係する内容のものが届いていたと説明できるという。<sup>(4)</sup>

加賀国關係の文書の發給者として頻出する散位藤原某は花押・自書の筆跡から藤原親賢に比定できるとされる。<sup>(5)</sup> 彼は『洞院家部類』卷之十四に、「大治三八佐渡守、元木工允、大夫」、「女院主典代」とあり、大治三年八月には佐渡守になつたことが知られる(『朝野群載』卷十一大治三年八月二十八日佐渡守藤原親賢書状〔移遣配流人申文〕も参照)。『尊卑分脈』によると、北家魚名流で、「白川院主典代(或判官代)、佐渡守、從五上、木工允」と見え(二二・二七〇頁)、諸大夫の家柄であるが、白河院とのつながりで院近臣の上首者である家保・家成の用務に起用されたものと推定できよう。

【18】に「親賢非二年來近習之上、為京沙汰人」とあり、【44】に「自去々年忘吏途、罷成京侍」と見えるので、親賢は「吏途」受領郎等として任国に下向していたが、天治二年(一一二五)頃には都に戻つていたことが窺われる。これは『中右記』天永二年(一一一一)正月二十一日条に「外記・史叙爵之後、為受領執鞭赴遠国、巡年之時、參上関其賞、近代之作法也」とあるように、受領任用の時期が近づいたので、上京し、在京の國務關係者の役割を果していたものと思われる。<sup>(6)</sup>

院政を始めた白河上皇が死去したのは、本文書群の越中国關係文書に見える大治四年のことである(七十七歳)が、『中右記』同年七月十五日条の裏書には「法皇御時初出来事」として、「受領功万石万足進上事。十余歳人成受領事。卅余国定任事。始自我身至子三四人同時成受領事。神社仏事封家納、諸国吏全不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>弁済<sub>一</sub>事。天下過差逐

レ日倍增、金銀錦繡成<sup>二</sup>下女装束<sup>一</sup>事。御出家後無<sup>二</sup>御受戒<sup>一</sup>事」という著名な記述が存する。これらのうち、過半は受領や地方支配に関する事柄であり、院宮分国・知行国の展開や本文書群の加賀・越中両国に看取される院近臣による任国独占（図1を参照）などによって惹起された変化を反映している。<sup>⑦</sup>この十二世紀前後は、上述の在庁官人一覧表によると、例えば伊賀国ではそれまでの古代豪族の系譜を引く氏姓の人々から平氏・源氏に連なる人々へと大きく変遷しており（大きな変化がない国もある）、坂東諸国でも三浦氏・千葉氏など後に鎌倉幕府設立に参画する有力武士が国衙機構に一定の地歩を得ることが窺われる。<sup>⑧</sup>武士の棟梁になる清和源氏、特に河内源氏も義家の頃に坂東武士の家人化が進んだのではなく、義朝・頼朝の段階を俟たねばならなかったとされており、義家の子義親を討伐して、院近臣として伊勢平氏が台頭していくのは、正に白河院政期であって、武士の中央での活躍が本格化する時代となる。<sup>⑨</sup>このような新しい情勢の中で、地方統治のしくみやそこに参画する人々のあり方がどのように転展するのか、この点も本文書群の検討を通じて、何らかの糸口を得ることを期待したい。

# 一 加賀守藤原家成の場合

大治二年正月十九日、元若狭守の藤原家成は白河法皇の院分御給により加賀守になった。彼は時に二十一歳、従五位上で、左兵衛権佐は兼官のままであったという（『中右記』同年正月二十日条、『公卿補任』保延二年条尻付）。家成は院近臣として名高い善勝寺流に属し、加賀国は藤原為房（寛治四年〔一〇九〇〕～同六年任）、高階為章（寛治七年～永長元年〔一〇九六〕）、源季房（村上源氏、顕房の子雅実の子。永長元年～長治元年〔一一〇四〕）、藤原敦兼（道綱の曾孫。長治元年～天永二年〔一一一一〕）、藤原顕輔（天永二年～元永元年〔一一一八〕）、藤原実能（元永元年～保安二

\*……は猶子関係を示す

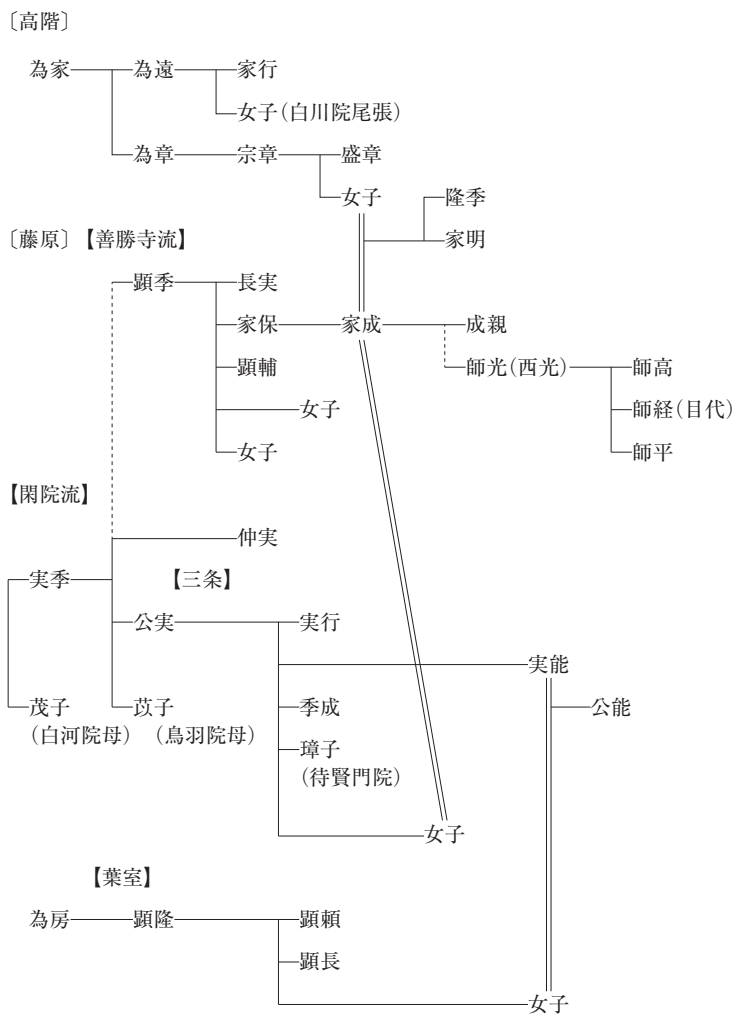


図1 加賀・越中国守関係略系図



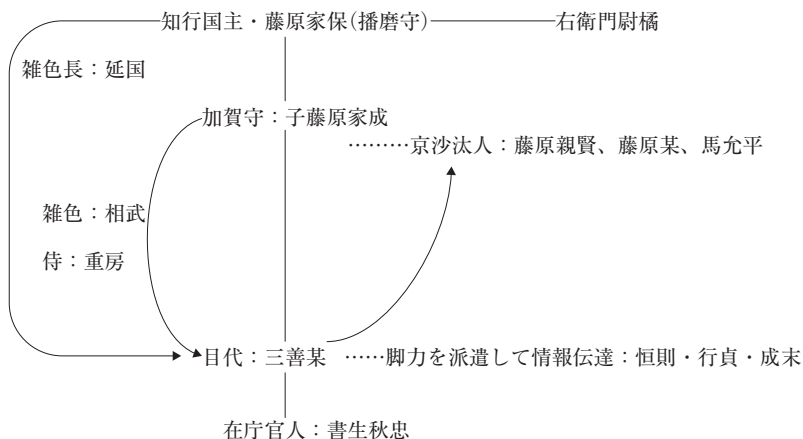


図2 加賀守藤原家成の國務関係者

年(一一二二)、藤原季成(保安二年～大治二年)といった面々が国守になっており、家成の後司は高階宗章(大治四年十一月二十五日)長承元年(一一三二)であって、院近臣と目される人々が任用される例が多い(図1)。家成の父家保は時に四十八歳、播磨国の知行国主で、待賢門院別当として院近臣の中でも枢要の位置にあった(『公卿補任』長承元年条尻付を参照)。

表1によると、本文書群にも加賀国に播磨守藤原家保関係の依頼事項が届いており(〔15〕)、家成の当時の年齢を考慮すると、実際には家保の家政組織が領導する形で加賀国の國務運営がなされたものと推定される。「はじめに」で触れた在京の藤原親賢や目代三善某、また表1に登場する人々を含めた形で、加賀守藤原家成の國務執行組織を示すと、図2のようになる。

加賀国関係の文書でまず注目すべきは、加賀守藤原家成が任初にあたり、国内の状況を掌握するために国衙に注進を命じた目録と目される「國務条事」である。これは次の八十九項目に亘るもので、当該期の國務運営の要諦を教えてくれる。01神社下符毎年員数事、02仏寺同前、03去年見作田事(前司任加三作年「手カ」)、04分附文書等、05国内田代所事、06庄園等事(領主并官省符)、07頼料米事、08農料稻



事〈三万束、稻請取日可<sub>二</sub>出計<sub>一</sub>〉、09諸郷勸農事〈種子下行同国事、田数可<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>名注文<sub>一</sub>〉、10廻日記事、11歴名帳事、12国雑色事、13国侍事、14細工所事〈人数并作物、染物〉、15国内土産物事、16一所目代事〈各得分并公物〉、17浦々海人事〈所<sub>レ</sub>免物〉、18納所事〈得分公物〉、19京上米運賃事、20同米綱丁事、21国内東西南北行程事、22国内神社員事〈司〔同力〕得分〉、23国〔同力〕寺事〈同得分〉、24郷・保司佃并得分〈国人、御館人〉、25田率色々物事〈加官物〉、26検田使得分事、27收納使得分事、28一任一度徴下物事、29御引出物事、30御節料事、31田率外徴下物事、32神民等事、33先達等事、34女騎事、35国領桑事、36船所事〈付勝載所〉、37国梶取事、38津々事〈付海人〉、39国内富人事、40国舎人数事、41御館分田事、42神社・仏寺免田事〈并得分〉、43国内船員事、44前司引出物事〈遣<sub>二</sub>諸司<sub>一</sub>〉、45鮭魚河事、46綾織事〈錦綾〉、47納官封家員事、48国佃事、49在家公事勤否事、50調所土毛事、51検畠事、52国内牧事〈馬・牛〉、53国領漆事、54国領鶯栖事、55胡録〔録力〕事、56郷・保等領主事〈自<sub>二</sub>中古<sub>一</sub>以降〉、57藍・茜等事〈藍田二十丁〉、58布上中下事、59紅花事〈両数〉、60綿事〈同、交易物内〉、61糸事〈同、同前〉、62八丈絹事〈上中下、同前〉〔随<sub>レ</sub>状可<sub>レ</sub>濟〕、63庁并郡司申請事、64院御庄加納田事、65同御庄代可交替事、66油事、67袖事〈交易物内〉、68済物抄帳事、69調所印事〈并尺〉、70条事国解事、71納官封家事、72勝載所事〈得分一所目代内入了〉、73京上夫事〈夫領料、夫功〉、74京宿人事、75在家計事、76及六別当事、77巫女別当事、78斗升事、79味噌事、80勅旨田事、81位田事、82桑代〈糸・八丈〉事、83御帷布事、84移花事、85在庁書生員数事、86郡司大名事、87□〔狩力〕公□〔郷力〕事、88国中関事、89国内悪人勧善事。

これらを便宜上、いくつかに分類すると、次のようになる（複数の分類に亘るものもある）。

国司交替事務関係：04・07・10・29・44・55・68・70・78

社寺の掌握：01・02・22・23・32・33・42・77

田地の把握・勸農…01・05・06・08・09・25・26・27・31・35・41・42・48・51・53・56・57・64・65・80・81・82

国内諸勢力の掌握…11・12・13・14・16・17・18・(19)・20・24・26・27・34・36・37・38・39・40・50・56・

63・64・65・69・72・76・77・85・89

風土の把握…15・17・21・38・43・45・52・54・87・88

京上のための徴発…19・20・73・74

済物・徴税関係…25・28・30・31・35・45・46・47・49・50・51・53・57・58・59・60・61・62・66・67・71・

75・78・79・82・83・84

では、こうした「国務雑事」の注進は国司の交替過程の中ではどの時点で行われるのであろうか。本文書群と近接する時期の国務の全体像を知り得る史料である『朝野群載』巻二十二には「初任国司庁宣」として、新任の国司が任国にまず伝達すべき文書の雛型が掲げられている。

a—1 『朝野群載』巻二十二加賀初任国司庁宣

新司宣 加賀国在庁官人・雜任等。仰下三箇条事。一可<sub>レ</sub>早進<sub>二</sub>上神宝勘文<sub>一</sub>事。右件神宝、或於<sub>レ</sub>京儲<sub>レ</sub>之、或於<sub>レ</sub>国調<sub>レ</sub>之者、且進<sub>二</sub>上勘文<sub>一</sub>、且可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>其勤<sub>一</sub>。又恒例神事、謹守<sub>二</sub>式日<sub>一</sub>、殊可<sub>レ</sub>勤行<sub>一</sub>矣。一可<sub>レ</sub>催<sub>二</sub>行農業<sub>一</sub>事。右国之興復、在<sub>二</sub>勸農<sub>一</sub>。農業之要務、在<sub>二</sub>修池溝<sub>一</sub>。宜<sub>下</sub>下<sub>二</sub>知諸郡<sub>一</sub>早令<sub>中</sub>催勤<sub>上</sub>矣。一下向事。右大略某月比也。於<sub>二</sub>一定<sub>一</sub>者、追可<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>之。以前条事、所<sub>レ</sub>宣如<sub>レ</sub>件。宜<sub>二</sub>承知依<sub>レ</sub>件行<sub>レ</sub>之。以宣。延喜十年 月 日。

a—2 『朝野群載』巻二十二但馬国初度国司庁宣

〈初度〉庁宣 但馬国在庁官人等。仰下雜事。一可<sub>レ</sub>勤<sub>二</sub>任恒例神事<sub>一</sub>。右国中之政、神事為<sub>レ</sub>先。專致<sub>二</sub>如在之嚴奠<sub>一</sub>、

須<sub>レ</sub>期<sub>二</sub>部内之豊稔<sub>一</sub>。一境殷富、乃貢易備、百姓安堵、資用已足者。一可<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>固池溝堰堤<sub>一</sub>事。右農務之要、尤在<sub>二</sub>池溝<sub>一</sub>。宜<sub>下</sub>知<sub>二</sub>諸郡<sub>一</sub>早致<sub>二</sub>修固<sub>上</sub>也。一可<sub>レ</sub>催<sub>二</sub>勸農業<sub>一</sub>事。右国以<sub>レ</sub>民為<sub>レ</sub>本、民以<sub>レ</sub>農為<sub>レ</sub>先。然則乃貢之備、尤在此事。早以勤行者。以前条事、所宜如<sub>レ</sub>件。宜<sub>下</sub>知<sub>二</sub>此状<sub>一</sub>依<sub>レ</sub>件行<sub>レ</sub>之。故宣。年月日。守。

a—3 『朝野群載』卷二十二但馬国第二度国司庁宣

〔第二度〕庁宣 在庁官人等。仰下条事。一可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>注<sub>二</sub>進官物率法<sub>一</sub>事。右色々率徴一々可<sub>二</sub>注進<sub>一</sub>之。一可<sub>三</sub>同注<sub>二</sub>進一  
所目代并郡司・別符司等事。右為<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>尋沙汰<sub>一</sub>、早可<sub>二</sub>注進<sub>一</sub>之。一可<sub>三</sub>同令<sub>レ</sub>注<sub>二</sub>進当年田数并国内起請田農料<sub>一</sub>之事。  
右国中之政、農料為<sub>レ</sub>先、官物為<sub>レ</sub>宗。早注<sub>二</sub>委細<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>進上<sub>一</sub>。兼可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>用意<sub>一</sub>之故也。一可<sub>レ</sub>参<sub>二</sub>上在庁官人等兩三  
人<sub>一</sub>事。右為<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>問先例国事<sub>一</sub>、為<sub>レ</sub>宗之輩、可<sub>二</sub>参上<sub>一</sub>之。以前条事、所宜如<sub>レ</sub>件。在庁官人等、宜<sub>二</sub>承知依<sub>レ</sub>件行<sub>レ</sub>之。  
元永元年十二月九日。右兵衛權佐兼大介藤原朝臣。

b—1 『朝野群載』卷二十二定遣国目代庁宣書様

庁宣 在庁官人等。定<sub>二</sub>遣目代<sub>一</sub>事。散位中原朝臣〔某〕。右人、為<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>執行一事已上、所<sub>二</sub>定遣<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>件。宜<sub>二</sub>承知依<sub>レ</sub>件行<sub>レ</sub>之。以宣。年月日。守。

b—2 『朝野群載』卷二十二定遣国目代源清基庁宣

庁宣 在庁官人等。散位源朝臣清基。右件人、為<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>執行国務、補<sub>二</sub>目代職<sub>一</sub>、発遣如<sub>レ</sub>件。在庁官人等、宜<sub>二</sub>承知<sub>一</sub>。  
一事已上、可<sub>レ</sub>從<sub>二</sub>所勘<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>違失<sub>一</sub>。故宣。年月日。守藤原朝臣。

c—1 『朝野群載』卷二十二送前司館書狀書様

某謹言。除目案内、定風聞候歟。御上道何程乎。可<sub>レ</sub>然者、於<sub>二</sub>洛下<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>待候。請<sub>二</sub>近將執啓<sub>一</sub>。謹言。月日。  
加賀守某。謹々上前司御館。

c—2 『朝野群載』 卷二十二 献新司許書狀書様

某頓首謹言。披<sub>レ</sub>「<sub>二</sub>閱除書<sub>一</sub>」、被<sub>レ</sub>拜<sub>二</sub>「任当国<sub>一</sub>」、本意已足、喜悅亦深。幸甚々々。抑態軾之期何程許乎。慥承<sub>二</sub>「案内<sub>一</sub>」、可<sub>レ</sub>参<sub>二</sub>「仕境間<sub>一</sub>」。但御頓料解文注<sub>二</sub>「別紙<sub>一</sub>」、謹以進上、伏賜<sub>二</sub>「恩納<sub>一</sub>」、跪所<sub>二</sub>「望也<sub>一</sub>」。某頓首謹言。謹々上新司殿<sub>（政所）</sub>。

c—3 『朝野群載』 卷二十二 頓料解文書様

進上 新司頓料物事。合若干。右依<sub>レ</sub>例進上如<sub>レ</sub>件。延喜十年 月 日。前司藤原朝臣。

a—1は延喜十年（九一〇）とあり（c—3も）、十世紀初にこのような形の文書を発給していたかどうか不審も残るが、『兵範記』久寿三年（一一五六）三月十三日条には三月六日に伊予守になった藤原親隆による使者派遣、初度庁宣下達の子細が知られ、初度庁宣は「伊予国在庁官人等」宛に「一可<sub>レ</sub>勤<sub>二</sub>行恒例神事<sub>一</sub>事」、「一可<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>神宝勘文<sub>一</sub>事」、「一可<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>築池溝堰堤<sub>一</sub>事」の三箇条が下されており、a—1とはほぼ同内容であるから、a—2・3と合せて、十一、十二世紀の様態を窺わせる材料として参照したい。a—1、そして『兵範記』にも見える神宝の件は任国下向時の神拝に関連するものと目され、因幡守平時範の任国下向の様子を記す『時範記』承徳三年（一〇九九）二月九日条では「於<sub>レ</sub>京儲<sub>レ</sub>之」の方式がとられたことがわかる（二月二十六日条で宇倍社を始めとして、遠社には使者を派遣して、諸社に奉献<sub>（11）</sub>）。

a—1では三条目に任国下向の件も伝達されているが、a—2・3では初度庁宣で神事励行と勸農を指示する点では共通するものの、任国下向には言及がない。a—2・3は道隆流の藤原忠隆の但馬守就任に伴う実際の文書を掲載したもので（『公卿補任』久安四年条尻付によると、十一月二十九日任。ちなみに、前任者は藤原家保である）、彼は時に十七歳、父播磨守基隆が但馬国の知行国主であったために任用されたと考えられ、年齢や兼官などから見て、忠隆が国務を領導したり、任国に下向することは想定されていなかったと思われる<sub>（12）</sub>。こうした状況は本文書群中の加賀守藤原家

成とも相通じるところであり、a—2・3が家成の就任時の文書発給のあり方を検討する上で、参考になると言えよう。

a—3では一・二条目で税率や国郡官人の様子など国内情勢の報告を求め、四条目では「先例国事」を召問するため、在庁官人の上京を指示している。これは正しく「国務雑事」が内容として掲げる諸事項の注進に関連するものであり、「国務雑事」はこうしたタイミングで、国司交替の最初期に必要な文書であったと解される。a—3は国司任命から十日程後に発給されており、家成の場合も同様の時期に情報掌握を求めたものと目される。但し、既に指摘されているように、08・09には勸農業務の具体的予定が割り書きされているので、「国務雑事」そのものの発給時期はもう少し遅れるもの、目代三善某の着国の最初期に指示されたと見る余地があると考えられよう。<sup>(13)</sup>なお、「国務条々」第七条「一 扱<sub>レ</sub>吉日時<sub>一</sub>入<sub>レ</sub>境事<sub>一</sub>」には「在京之間、未<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>吉日時<sub>一</sub>者、逗<sub>二</sub>留<sub>一</sub>迎下<sub>一</sub>。其間官人・雜任等慮外来着、令<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>事由<sub>一</sub>者、随<sub>レ</sub>形召上、可<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>国風<sub>一</sub>。但可<sub>レ</sub>随<sub>レ</sub>形。專不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>云<sub>二</sub>無益事<sub>一</sub>。外国之者境迎之日、必推<sub>二</sub>量官長之賢愚<sub>一</sub>」とあり、人との積極的な接触を戒める観点が示されている。ここには『今昔物語集』卷二十八第三十九話「寸白、任<sub>二</sub>信濃守<sub>一</sub>、解失語」に描かれた、強かな在庁官人らに対する警戒、京下者と国人との緊張関係が反映されているものと考えられるが、a—3では任国下向を前提としない形で、在庁官人を下僚として駆使しようとする姿勢が窺われ、新たな関係形成が展望されるところである。

こうした最初期に必要な情報は、「在京雑掌」なる存在によって齎される場合もあった。本文書群では加賀守家成の「京沙汰人」として活躍する藤原親賢が佐渡守に就任した時、在京雑掌を召して国情を尋ねたところ、配流人の源明国（撰津源氏）が来てから国務対捍が多くなった旨を知り、明国を他国に移して欲しいと申請している（『朝野群載』卷十一 大治三年八月二十八日佐渡守藤原親賢書状）。但し、雑掌は国司任中の公文勘済とその前提となる済物進上を職務の基本とし、中央と地方を往来するものであり、「在京雑掌」という特別な存在形態の雑掌がいる訳ではない。国司が任国

に下向している場合は、在京している雑掌が国務に関わる中央等からの命令を受納する役割を果たす場合もある。ちなみに、雑掌と弁済使には共通性があり、両者が同一人物と解される事例も存しており、ともに実務に通曉した中央の中下級官人が起用されていたと考えられ、弁済使には同一国で数代の受領に奉仕する例や複数の国を歴任する例も知られる。<sup>(14)</sup>

「国務条々」第二十條「一、一 摺<sup>二</sup>吉日<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>度<sup>二</sup>雜公文<sup>一</sup>由牒<sup>三</sup>送前司<sup>一</sup>事」は前司と新司が任国で交替政を行うことを想定して記されているが、そこに登場する「所謂前々司任終年四度公文土代、交替廻日記、前司任中四度公文土代、僧尼度牒・戒牒、国印・倉印・文印、駅鈴、鈎匙、鉄尺、田図、戸籍、詔書・勅符・官符・省符、譜前〔第カ〕図、風俗記文、代々勘判、封符、不与状、実録帳案、交替日記〔税帳、大帳、租帳、出拳帳、調帳、官符長案、地子帳等合文、諸郡収納帳案等也〕、自余公帳随<sup>二</sup>国例<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>〔耳カ〕」には、「国務雜事」の項目と関連すると目されるものも存する（交替廻日記：10、僧尼度縁・戒牒：02・23、田図：03・05・06など田地の把握・勸農関係、詔書・勅符等：04、譜第図：86など国内諸勢力の把握、封符：71、風俗記文：15などの風土の把握、交替日記：68）。そして、「国務条々」第十八條「一、一 摺<sup>二</sup>吉日<sup>一</sup>始<sup>二</sup>交替政<sup>一</sup>事。神拝之後、摺<sup>二</sup>吉日<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>始行<sup>二</sup>之由牒送<sup>一</sup>。前司随則送<sup>二</sup>分配目代於新司許<sup>一</sup>行<sup>レ</sup>之。至于勘<sup>二</sup>公文<sup>一</sup>目代<sup>上</sup>者、更不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>論<sup>二</sup>貴賤<sup>一</sup>、唯以<sup>二</sup>堪能人<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>為<sup>二</sup>目代<sup>一</sup>。公文未練之者、勘<sup>二</sup>済公文<sup>一</sup>之時、并前後司分付之間、極以不便也。事畢之後、搔<sup>レ</sup>首無<sup>レ</sup>益」などに強調されるように、ここには公文の扱いに長じた目代の存在が不可欠であった。

以上を要するに、「国務雜事」は、任国下向、任国での交替政実施などの予定がない中で、任国の状況を把握するために不可欠のものであり、国司就任の最初期に発給されるべきで、本文書群の中では最も早い日付に位置づけることができる。ちなみに、『兵範記』の伊予国の事例は後述の先（前）使派遣に伴うものであって、目代は「次目代下<sup>二</sup>対庭

中「賜」文筥「〈着国并在庁可レ進請文一日次等、并別紙副給也〉」と、発遣の儀式には参加しているが、目代本人の下向は予定を伝えるのみであり、先使の帰京後に目代の発向となるのであろう。表1によると、本文書群の加賀国の場合は、日付が明確なところでは三月中旬以降のものが散見し、四月初旬には都からの度々の書状に対して報状未到の旨が指摘されているので〔23〕、この頃に目代の着国、始動に伴う錯綜した状況が続いている様子が看取される。

なお、『今昔物語集』卷二十八第二十七話「伊豆守小野五友目代語」によると、「年六十許ノ男ノ大キニ太リテ、宿徳氣也。打咲タル氣モ無クテ、氣慄氣ナル顔シタレバ」が「目見ハ吉キ目代形ナメリ」と評されており、目代には「手ノ書様微妙クハ無ケレドモ、筆輕クテ目代手ノ程ニテ有リ」、「搔乱レタル事ノ沙汰ノ文ヲ取テ、『此ノ物何ラカ入タルト、沙汰セヨ』ト云ヘバ、此ノ男、文ヲ取テ引披テ打見テ、算取出シテ糸輒ク打置テ、程モ無ク、『何ラナム候ケル』ト云ヘバ」という文筆・計算の能力に裏付けられた事務処理力が求められた。そして、目代は「文書共多ク取散シテ、亦下文共ヲ書セテ、其レニ印ヲ指ス」といった職務を果すことが期待されている。加賀国の目代三善某もそうした風貌と能力を有し、国衙で文書作成に勤しむ日々であったと想像される<sup>15)</sup>。

ちなみに、c-2・3には前司から新司に対して頓料なるものが進上されることが知られる。これは『小右記』治安元年（一〇二一）二月二日条に「伯耆頓料麻百端以ニ懷信朝臣奉入道殿」、依「近代例」ある、伯耆守藤原資頼が藤原道長に献上したものと異なり、受領交替に伴って前・後司間で贈呈される物品のようである。「国務雑事」には「頓料米事」（07）が見え、これがその存在を示す実例と言える。c-1を参照すると、c-2・3は前司がまだ任国に滞在している段階で、当地で後司に国務を引き継ぐ際に進上する方式になっているが、加賀守藤原家成の場合は任国下向は想定されていない（前司も当地にはいなかった）ので、目代がその授受に与ることになるため、この項目が「国務雑事」に掲載されていると考えられる。



さて、こうした国情を掌握した上で、加賀守藤原家成の下での国務が遂行されることになるが、新司の行事として国除目なる国領の充行がなされたことが知られる〔44〕<sup>16</sup>。当時の加賀国の莊園・公領の動向については既に優れた考察が行われており、ここではその成果を要約して整理してみたい。上述のように、加賀国は北家高藤子孫で勤修寺流などの祖となる白河院近臣として名高い藤原為房以降、院近臣が拝任することが多かった。こうした中で国衙領の諸職に補任することにより、院近臣や関係者が公領の経営・所務に参画することで、得分の収入を得るといふ構造的支配が浸透していくことになる。家成の任初においても、尾張局（白河院乳母）に芹田郷、興保、益富保、勝載所が預けられ〔6〕・〔20〕・〔44〕、藤原親賢も「白江保司職并弓木目代」への補任が知られ〔13〕、「所知」につき沙汰人等派遣の時機を問い、目代に助力を求める書状が発給されている様子が看取される〔23〕・〔44〕・〔29〕。

尾張局は高階為遠の女で（図1）、彼女に預けられた芹田郷は遠江殿Ⅱいとこの高階宗章（為遠の兄為章の子。宗章の女子は家成と結婚）が沙汰するものとされており〔6〕、実際には男性官人である院近臣が差配を行い、院への奉仕の原資あるいは奉仕に対する得分（御恩）となって君臣関係が維持されるのであろう。宗章は下人を派遣して経営に従事させるといい、守家成の京沙汰人である藤原親賢も「所知」管理のために沙汰人を派遣する予定であつて、ここにも主従関係が発生することになる（表2参照）。そして、こうした京下りの沙汰人に対しては目代が「指南」の者や「後見」を行うことで〔13〕によると、庁宣を目代に進上し、留守所符により「所知」が保証された、遠隔地の土地経営が実現し、都に富が集中する、経営に参画することで中央と地方の交通や人的関係が構築されるというしくみになっていたのである。

但し、国衙領の管理は国司交替の度毎に更新されるものであり、それ故に国除目の如き行事が挙行されたのであろう。表2のうち、能美郡山下郷について、民部大夫卜部兼仲は「前司御沙汰敷、不<sub>レ</sub>相<sub>二</sub>叶<sub>二</sub>当<sub>二</sub>任御沙汰<sub>一</sub>候」とあるので、正

表2 加賀国の国衙領。荘園とその経営

〔江沼郡〕	…	【17】	江沼郡勸農使飛驒前司（藤原景実）が下向
若宮御封	…	【17】	請使召使重見・茂延を下遣
熊坂御庄	…	【6】	高階宗章が下人を派遣か
額田御庄	…	【35】	前預所相模前司（源有兼）／@ 【35】・【37】紛擾あり
		【20】	検注～庁官知貞（【44】）が遷替所申文に加判
◎〔能美郡〕			
山下郷	…	【48】	民部大夫（卜部兼仲）～「前司御任沙汰歟、不相叶当任御沙汰候」
白江保・弓木	…	【13】	藤原親賢が「所知」～庁宣を目代に進上し、留守所符により保証
		／@ 【5】	親賢納所見ユ
勝載所	…	【44】	御乳母（尾張局）に給預
〔石川郡〕			
益富保	…	【44】	御乳母（尾張局）に給預
〔加賀郡〕			
芹田郷	…	【6】	大盤所御乳母尾張局に給預 →遠江殿（遠江守高階宗章）が沙汰し、下人を派遣
興保	…	【44】	御乳母（尾張局）に給預／@ 【20】保司代の下向見ユ
※その他、【15】によると、播磨守藤原家保（守家成の父、加賀国の知行国主）が7月末に「私物沙汰」のために雑色長を派遣しているのが、加賀国に所領を有していたか。			

しく新司との関係如何によつて左右されたことが知られる。<sup>17)</sup>  
 d 半井家本『医心方』紙背文書【30】年月日未詳某定文覚  
 勸乃事。今度請文云、古作田已六百町不<sub>レ</sub>了了<sub>一</sub>。非<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>乃  
 み〔料カ〕<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>非例<sub>一</sub>。雖<sub>レ</sub>然前司郎□〔等カ〕上下  
 人及<sub>二</sub>千余人<sub>一</sub>、是皆悉件田堵等也。仍其処作田不<sub>二</sub>力及<sub>一</sub>由  
 所<sub>二</sub>陳申上<sub>一</sub>也。実希有陳□〔述カ〕哉。何新司か前司京下  
 人を擲留<sub>天</sub>令<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>田候哉。縦在庁官人・諸郷□・保司等雖  
 申<sub>二</sub>此旨<sub>一</sub>、令<sub>二</sub>同意<sub>一</sub>□申<sub>二</sub>上言語<sub>一</sub>□〔道カ〕断解状<sub>一</sub>候歟。  
 如何々々。全可致不作□不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>候。只大略勸乃を致、如泥  
 何故□。此条如延政に可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>候也。  
 e 『類聚符宣抄』第一天元二年二月十四日官符  
 応<sub>レ</sub>補<sub>下</sub>任坐<sub>二</sub>筑前国<sub>一</sub>宗像宮大宮司正六位上宗形朝臣氏能<sub>上</sub>  
 事。（中略）重檢<sub>二</sub>傍例<sub>一</sub>、坐<sub>二</sub>筑前国<sub>一</sub>高良大神宮司、代々国  
 司以<sub>二</sub>郎等一人<sub>一</sub>補<sub>二</sub>任檢校職<sub>一</sub>令<sub>二</sub>執印行事<sub>一</sub>。每<sub>レ</sub>至<sub>二</sub>遷替之  
 日<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>弁<sub>二</sub>勤惰<sub>一</sub>弃以京上。仍去安和二年八月五月初蒙<sub>二</sub>官  
 符<sub>一</sub>、補<sub>二</sub>任大神宮司<sub>一</sub>以降、神威弥嚴、修治無<sub>レ</sub>怠。加以当  
 国住吉・香椎・筑紫・竈門・筥崎等宮、皆以<sub>二</sub>大宮司<sub>一</sub>為<sub>二</sub>其  
 所之貫首<sub>一</sub>。而當宮一人兼任、無<sub>レ</sub>分<sub>二</sub>置其職<sub>一</sub>、校<sub>二</sub>於是等之

例<sup>一</sup>、事寄似<sup>レ</sup>輕。(下略)

こうした状況は国司郎等の動向にも看取され、dによると、前司藤原季成が郎等千余人を古作田六百町の田堵にしていたため、彼らの退去により新司家成の代に作田が引き継げず、勸農を指示しなければならない事態になっていたことがわかる。国司交替による国務の継続性如何、受領に随従する郎等の行動については、やや時代が遡るが、eの筑後国の事例が存する。即ち、高良玉垂神社は国府後背地の高良山に所在し、後に一宮となるが、ここには代々の国司が郎等を検校職に任命していた。しかし、国司が交替すると、勤惰にかかわらず、郎等は国司とともに帰京するので、管理担当者が空白になってしまうという問題があり、大神宮司という恒常的な職位を設置することになったのである。<sup>(18)</sup> dの「前司郎□〔等カ〕上下人及千余人」には誇張があるのかもしれないが、受領郎等だけで千余人という訳ではなく、郎等にはさらに随従者がいたから、それら「上下人」を加えての数値とすれば、強ち不審とは言えない。千余人は相当の勢力で、それら京下りの人々の下向・退去は当該国に与える影響が大きかったと目される。「国務雜事」03に「去年見作事〔前司任加<sup>三</sup>作年〔手カ〕<sup>二</sup>〕とあるのは、前司藤原季成の時に作手を新たに任じ加えたことを示していると解され、<sup>(19)</sup> 国司は郎等らにも得分を給付する必要があったのである。

dではまた、「在庁官人・諸郷□・保司等」の申上が問題とされており、「国務雜事」63に「庁並郡司申請事」があるのは、この前後に交易物を中心とする雑役関係の事項や院領荘園の件が配されているので、国衙領の雑役徴収に関する紛擾が存したのではないかと指摘されるところである。<sup>(20)</sup> 在庁官人・郡司らが国司交替の時宜をとらえて、政務の刷新・国衙支配の強化を模索する行動に出る事例は多数あり、越中国では【8】年未詳九月十九日称宜祝部某書状に「抑当社之神人者、雖<sup>レ</sup>居<sup>三</sup>住諸国<sup>一</sup>、於<sup>三</sup>在家公事<sup>一</sup>者、皆被<sup>三</sup>免除<sup>一</sup>候処也。於<sup>三</sup>当国<sup>一</sup>は年来之間所<sup>下</sup>被<sup>三</sup>免除<sup>一</sup>候上<sup>也</sup>也。而當御任始藍役被<sup>三</sup>宛負<sup>一</sup>之由、神人等訴申候処也」とあるように、諸役免除の停止や荘園の改廃などが企図されることにな

る。<sup>(21)</sup>表2によると、加賀国でも江沼郡に熊坂御庄・額田御庄が存し、<sup>(22)</sup>これら院領莊園は正しく前司藤原季成が白河上皇の意を受けて立荘したものであって、国衙領掌握の不安定さを克服するものとして、恒常的な占有を確立しようとしたのであろう。

額田御庄については後述の在庁官人の動向を検討する際に言及したいが、ここでは国司の交替時の行事や京下り者の下向に関連して、【17】に登場する江沼郡勸農使飛驒前司「藤原景実の活動に触れておきたい。景実は利仁流、越前国の河合斎藤氏につながる武士団に属する人物で、『本朝世紀』康和五年（一一〇三）二月三十日条に「飛驒守藤原景実（前女御苺子給「喪家之間用途料」献「三万疋」也。越前国住人輔宗男」と見えており、鳥羽院の母后苺子（閑院流）の葬送料を献上して飛驒守になっている。『尊卑分脈』によると、弟宗康は「白河・鳥羽兩院下北面」とあるので（二三四三頁）、こうした人的つながりから、院近臣である閑院流と関係を結んでいたものと思われ、白河院―藤原季成が進める江沼郡の立荘にも参画し、その武力で貢獻することが期待されたのであろう。<sup>(23)</sup>景実は前司の人脈につながる人物であり、江沼郡に展開する院領莊園との関係で到来したものと思われるが、【17】には「去年若宮御封請使召使兩人（重貞・茂延）所「下遣」也。雖「非」御任之沙汰、若有「可」下「令」聞入「給」事者、殊「可」下「令」施「御会釈」御上也」とも記されており、新司の治下になっても前司の代から続く事柄は容易には断ち切り難いところがある。【25】にも「稚海藻供御綱丁事令「申カ」候、愚札付「飛驒前司下人」令「献」了。近松保事、付「飛驒前司下向之便」、令「献」了。此以前、又付「若宮御封請使」、令「申」巨細事等「候了」とあるので、新司側がこうした前司の關係者に加賀国との連絡を依存することもあったと考えられる。

『平家物語』卷七火打合戦によると、木曾義仲が北陸道を進軍し、越前国火打が城を築城した時、平泉寺長吏斎明威儀師、稲津新介（越前国足羽郡稲津が本拠）、斎藤六、林六郎光明（光家の子）、富樫入道仏聖（加賀国石川郡富樫が本

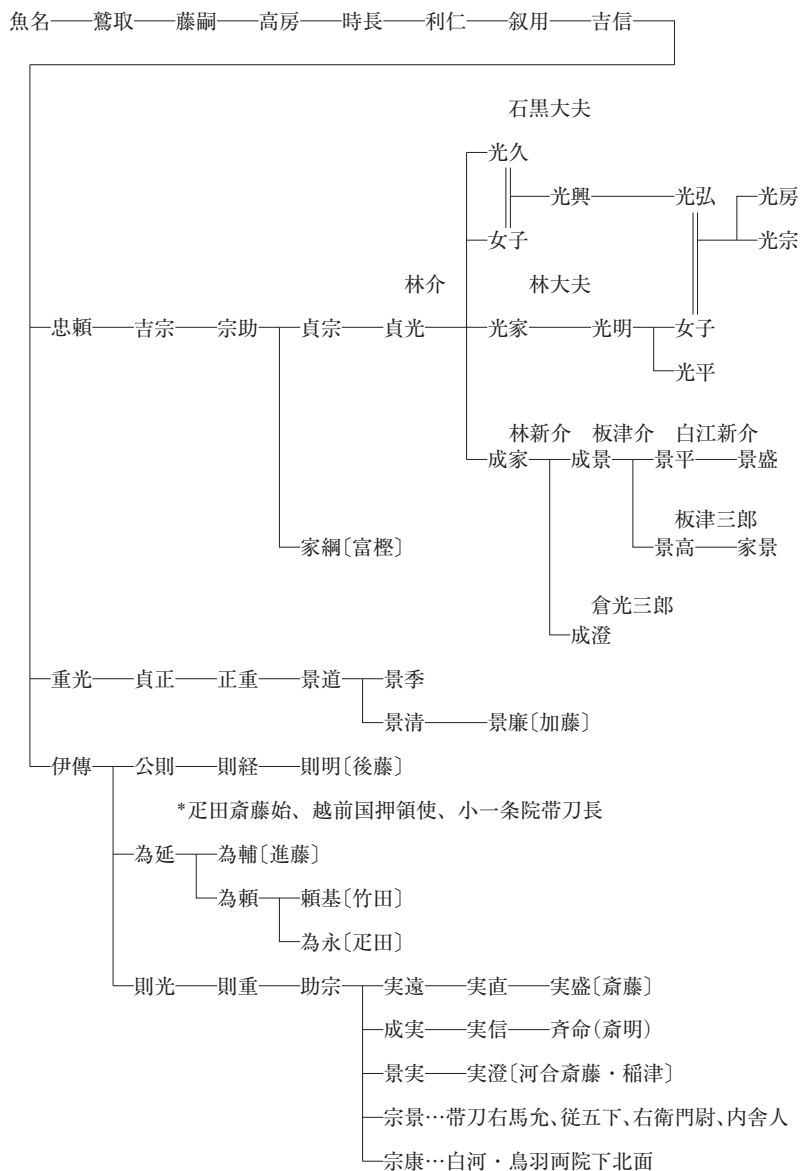


図3 北陸道の武士団と利仁流藤原氏の略系図

拠)、土田(能登国羽咋郡土田)、武部(能登国鹿島郡浅井庄武部)、宮崎(越中国新川郡宮崎)、石黒(越中国砺波郡福光)、入善(越中国新川郡入善)、佐美(加賀国江沼郡佐見)ら六千余騎が参加したと見える。その後、平家軍の接近により彼らは退去したといい、元来親平家であつた斎明は平家に帰属する一方で、稲津新介・斎藤六・林六郎光明・富樫入道仏聖は加賀国に引き退いて白山・河内に籠もつたと描かれているので、彼らは源氏方についたものと目される。<sup>24</sup>ここには利仁流藤原氏の面々も多く登場しており、稲津新介は『尊卑分脈』に「越前介、号『稲津新介』、又号『河合』」(二―三四一頁)とある実澄に比定され、景実の次の世代の人々が治承・寿永内乱で活躍することになる。

景実の家系は則光が「越前国押領使、民部少輔伊傳五男也、従五下、吉原三郎／<sup>二</sup>禊候宇治関白家<sup>一</sup>」、その子則重は「掃守助、越前権介／堀川院判官代、号吉原介」、その子で、景実の父助宗は「従五下、豊前権守／号<sup>三</sup>河合才守<sup>一</sup>、河合斎藤始」とあり(『尊卑分脈』二―三三七頁)、摂関家から院へと関係を移動しながら、地方にも拠点を築きつつあつた。

景実は「従五下、飛驒大和等守」(二―三三四一頁)と記されており、むしろ景実の子実澄が在庁官人の介を名乗るなど、<sup>25</sup>越前の武士として地歩を確立するものと目される。一方、加賀では則光と同世代の吉宗が「始住加賀国、従五下」

(二―三〇九頁)とあり、以降、加賀国を拠点に勢力を築いていくようである。景実と同世代の成家の前後から在庁官人の介の呼称が見え、成景の子景平は「白江新介」、その子景盛は「白江介」とあるので(二―三二三頁)、本文書群にも登場する加賀国府所在郡である能美郡の白江保を領有し、国衙機構に参画していくものと考えられる。

論が北陸道の武士団の展開に及び、加賀守藤原家成の任初の様態からは離れてしまったが、当該期はこうした事象につながる端緒となる時代相を示している。『平家物語』巻四「南都牒状」には「抑清盛入道は、平氏の糟糠、武家の塵芥なり。祖父正盛、藏人五位(藤原為房のこと)の家に仕へて、諸国受領の鞭をとる。大藏卿為房、賀州刺史のいにしへ、検非所に補し、修理大夫顕季、播磨太守たツし昔、厩別当職に任ず」、巻五「西光被斬」では「殿上のまじはりを

だにきらわれし人の子で、太政大臣までなりあがつたるや過分なるらむ。侍品の者の受領・檢非違使になる事、先例・傍例なきにあらず。なじかは過分なるべき」とあり、伊勢平氏の台頭もこうした階層から始まっていた。<sup>26</sup> 本文書群はそうした展開が可能になる構造を具体的に窺うことができる材料として興味深いと言えよう。<sup>27</sup>

f 半井家本『医心方』紙背文書【41】年月日未詳某書状

上啓 案内事。右、所<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>令<sup>二</sup>上啓<sup>一</sup>者、從<sup>二</sup>八幡法印御□〔房カ〕依<sup>二</sup>播磨守殿申請<sup>一</sup>、御□〔社カ〕權寺主増清  
当国諸寺別当所<sup>レ</sup>被<sup>二</sup>補任<sup>一</sup>也。仍御庁宣并諸寺注文等各壹通獻覽<sup>レ</sup>之。且又為<sup>二</sup>沙汰使者<sup>一</sup>宗里所<sup>二</sup>下遣候<sup>一</sup>□〔也カ〕。  
雖<sup>二</sup>未<sup>レ</sup>蒙<sup>レ</sup>仰事<sup>一</sup>、依<sup>二</sup>如<sup>レ</sup>此沙汰<sup>一</sup>、故令<sup>レ</sup>申<sup>二</sup>案内<sup>一</sup>之候。尤御許容候者生前之幸也。於<sup>二</sup>自今以後<sup>一</sup>者、兼内外蒙<sup>レ</sup>仰、  
又可<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>申<sup>二</sup>案内<sup>一</sup>之旨、深所<sup>二</sup>存候<sup>一</sup>也。若使者男触<sup>レ</sup>事候者、付<sup>二</sup>事々<sup>一</sup>令<sup>レ</sup>施<sup>二</sup>芳心<sup>一</sup>、又可<sup>レ</sup>候<sup>二</sup>御用意<sup>一</sup>。猶委<sup>二</sup>旨期<sup>一</sup>  
御上道之時<sup>一</sup>也。□

g 『古事談』第二・臣節 \*藤原隆方は承暦二年（一〇七八）十二月十一日卒

但馬守隆方ハ於<sup>二</sup>任国<sup>一</sup>逝去。然而秘<sup>二</sup>国人<sup>一</sup>、称<sup>二</sup>重病之由<sup>一</sup>、舍弟僧声気色似タリケルヲ、輿ニノセテ上道、死人ヲバ  
入<sup>二</sup>辛櫃<sup>一</sup>相具云々。是国人之心為<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>變也。仍死人ヲバ撰津国羽束師内六瀬云所<sup>二</sup>埋畢<sup>一</sup>。今有<sup>二</sup>其墓<sup>一</sup>也。

こうした受領の国内統治を支える存在としては、宗教面での人材も重要である。f は石清水八幡宮別当法印の要請によつて、加賀国の知行国主で国守家成の父播磨守家保が八幡宮權寺主増清を加賀国の「諸寺別当」に補任したことを伝達したものであり、国守家成の庁宣と別当職関係の「諸寺注文」が国衙に下され、その沙汰のために使者が下遣されることを記している。増清は石清水別当法印大僧都光清の孫で、權別当法印増清のことであり（『尊卑分脈』四―一九九―二〇一頁）、このような權門社寺の上級幹部が知行国主の計らいで国の「諸寺別当」に補任されて、国衙の後ろ盾の下に寺社の本末関係を拡大・発展させることができたと指摘されている。<sup>28</sup> 『朝野群載』卷二十二「国務条々」第四十二



条には「一可<sup>レ</sup>随<sup>二</sup>身驗者并有智僧侶一兩人一事。人之在<sup>レ</sup>世、不<sup>レ</sup>能<sup>二</sup>無為<sup>一</sup>。之（為カ）<sup>レ</sup>国致<sup>二</sup>祈禱<sup>一</sup>、為<sup>レ</sup>我作<sup>二</sup>護持<sup>一</sup>」  
とあり、実際にもgのように国守の弟の僧侶が随行していた事例が知られる。但し、こうした中央からの人事は在地に  
混乱を齎す場合もあり、『今昔物語集』巻二十第三十五話「比叡山ノ僧心懷、依嫉妬感現報語」では、美濃守某に随従  
した心懷について、「守ノ北方ノ乳母、此ノ僧ヲ養子トス。然レバ、国司其ノ縁ニ依テ、方々ニ付テ顧ケリ。此レニ依テ、  
国ノ人此ノ僧ヲ一供奉ト名付テ、畏リ敬フ事無限シ」という状況を記し、一宮南宮社（中山金山彦神社）の前で挙行さ  
れた百座仁王講の際に惣講師に推挙されなかった心懷は、惣講師懷国供奉に対して「彼ノ一供奉甲ノ袈裟ヲ着テ、袴ノ  
扶ヲ上テ怖シ氣ナル法師原ノ長刀ヲ提タル、七八人ノ許ノ具シテ」という形で攻撃をかけて放逐した上で、自らが惣講  
師の作法を行い、布施を奪取したので、「残り留タル国人共ノ思タル兒・氣色、極テ本意無氣也」という反感を買った  
といひ、その後任終となった美濃守は都で死去してしまひ、支援者がいなくなった心懷も白癩の病になり清水坂本で居  
住・死去するという現報があつたと描かれている。

以上のような京下りの人々が惹起する相克や受領と在地勢力の關係如何については後述することにして、加賀国關係  
の文書から知られる国司の交替・任初の行事の検討をひとまず終え、次に越中国關係の文書の考察に進みたい。

## 二 越中目代の留任と加賀国

「はじめに」で触れたように、加賀守藤原家成の任初の諸行事に關与した目代三善某は、八月末頃までは「御目代殿」  
宛の書状を受納しているが（〔46〕）、九月五日付書状では「善大夫殿」と記されているので（〔49〕）、この時点では目代  
を改替され、残務処理に従事していたものと思われる。京沙汰人であつた藤原親賢も翌大治三年八月には佐渡守になつ

ており、加賀国の国務には関与しなくなるのであろう。家成の在任は大治四年末まで続いているから、六ヶ月程の活動で退任した目代三善某は任初の国務運営を軌道に乗せるために起用されたものと目され、受領巡任を待機していた親賢もその経歴を生かして在京の差配者として用務を果したのであって、通常の国務を遂行する目代、後司との交替を担当する目代などはまた専門の人物が任じられていたのかもしれない。<sup>30)</sup>

では、三善某はその後どうしたのであろうか。加賀目代退任後間断なくかどうかは不明であるが、彼は大治元年二月二十四日任の越中守藤原公能（父実能が知行国主）の目代に転じたことが知られ、本文書群に越中国関係の文書が残るようになった次第である。越中国では大治四年十二月二十九日に知行国主の交替があり（藤原実能↓藤原顕頼）、それに伴う国守交替（公能↓弟顕長（元紀伊守）、図1参照）に関わる様態を知ることができる。今回は三善某は引き続き後司の目代も勤めることになり留任するのであるが（後掲史料h・m）、やはり国司交替に関係する様々な出来事が看取され、前章の知見を補う様相を考究するようにしたい。この大治四年末には加賀国でも国守交替があり（『中右記』大治四年十二月二十五日条、藤原家成〔讃岐守に〕↓高階宗章〔元遠江守〕、越中国関係の文書にはその動向、また加賀国の国務や国内の状況を窺わせる書状が存し、加賀国に関する考察を付加することも期待される。

h 半井家本『医心方』紙背文書【14】（大治五年カ）正月三十日散位某書状（「」は紙継目を示す。以下、同じ）

「〔請カ〕 御教書事。□（石カ）、正月廿一日御教書、同月廿八日到來。仰旨□々承了。抑当国可「御相博候」由、去年□（十カ）二月十日被「仰下」、随俄十七日京上。而越前□（之カ）水津之渡二十三日除目ニ無「御相博」由依「被「仰下」、於「御目代勾当大夫」者京上、於「守則」□（者カ）為「令「国色々未進微納」、所「罷返」也。而不「慮」□（外カ）廿五日御相博候。猶可「上洛」由、正月三日□（脚カ）力到來者。因「之」、八日可「上道」仕「企」支度「候」□（処カ）、正月六日前使到來、旁支度相違。於「□（貴カ）国」者兩度之除目ニ不「御相博候」由承。□（而カ）俄十二月廿九日御相博。雖「然

御目代者、如<sup>レ</sup>本□〔可カ〕<sup>下</sup>令〔御佐〔沙〕汰<sup>上</sup>御上由承<sup>レ</sup>之候。所<sup>二</sup>悦思給候<sup>一</sup>也。抑□令<sup>二</sup>先日言上<sup>一</sup>、於<sup>二</sup>守則<sup>一</sup>罷者、他国之領所□好思給候。而依<sup>二</sup>貴殿御佐〔沙〕汰<sup>上</sup>御府〔符〕□□／□仰下者、御恩不<sup>レ</sup>可<sup>二</sup>申尽<sup>一</sup>。雖<sup>レ</sup>然司代法□〔師カ〕・□〔百カ〕姓等蒙<sup>二</sup>別仰<sup>一</sup>敢不<sup>二</sup>承引仕<sup>一</sup>、於<sup>二</sup>御任<sup>一</sup>□〔者カ〕触<sup>二</sup>縁候人両方人<sup>一</sup>候者、白地参候、令<sup>二</sup>子細<sup>一</sup>□〔言カ〕上<sup>二</sup>可<sup>一</sup>沙汰仕<sup>一</sup>候。何等事候とも仰候事者□□〔可承カ〕候。兼又白山河内紙之召候者、□紙数用紙数随<sup>レ</sup>仰可<sup>二</sup>進上仕<sup>一</sup>。委旨□〔又カ〕々可<sup>レ</sup>申候。状如<sup>レ</sup>件。謹言。正月卅日。散位（花押）。進上 越中御目代殿。

hは遷任となつた加賀目代の下にあつて国務の実務を担う人物から越中目代を継続する三善某に宛てられた書状で、日下の「散位」は文中の守則で、大江姓の大江守則に比定されている。<sup>31</sup> hでは後半部分において上述の越中目代留任に対する慶賀が述べられ、前半部分では当国Ⅱ加賀国の状況が記されており、大治四年十二月十三日の除目では相博がなかつたので、当初予定されていた京上の指示は目代のみが赴くことにし、守則は途上の越前国水津渡から加賀国に戻つて「国色々未進」の徴収に従事しようとしていたところ、二十五日にやはり相博が決まり、混乱している様子が伝えられる。ここではまず国司交替に関連して、新司（後司）が逸早く前（先）使を派遣しており、その到来・応対に煩多になることが注目される。

i 半井家本『医心方』紙背文書【10】年未詳二月十日大藏大輔某書状<sup>32</sup>

前使□〔将カ〕里、抑<sup>二</sup>留去年公物并郷保沙汰人等得分<sup>一</sup>之由、自<sup>二</sup>左兵衛督殿<sup>一</sup>所<sup>二</sup>令<sup>レ</sup>申給<sup>一</sup>也。早可<sup>レ</sup>令<sup>二</sup>免上<sup>一</sup>之由、可<sup>レ</sup>被<sup>二</sup>下知<sup>一</sup>者。権弁殿仰旨如<sup>レ</sup>此。悉<sup>レ</sup>之。謹状。二月十日。大藏大輔（花押）□〔奉カ〕。謹上 善大夫殿。

j 『為房卿記』寛治四年（一〇九〇）六月十七日条（\*六月五日加賀守任）

今日遣<sup>二</sup>前使於賀州<sup>一</sup>。雑色是員（雖疎略者）、任<sup>二</sup>遠州<sup>一</sup>、同遣<sup>二</sup>件男<sup>一</sup>。又有<sup>二</sup>年来勞<sup>一</sup>。

k『為房卿記』寛治五年八月八日条（\*三月五日子忠教が淡路守任）

少将、淡州被<sup>レ</sup>申<sup>二</sup>慶賀<sup>一</sup>。淡路先使雑色是員今日差遣。余拜<sup>二</sup>任兩州<sup>一</sup>之時、每<sup>レ</sup>度遣<sup>二</sup>件男<sup>一</sup>。（下略）

# 1『絵師草紙』

（上略）次日は、いそき人こしらへつゝ、田舎へ下つかはしむ。さるほとに、雲煙をしのく海路も、月日すくれば、心もとなかりつる雁の使もかへり来り、先うれしくて文をひらき見るに、所のありさまとおはしくて、土民の武威もかうする次第、先使かとりて、年貢のなき事はかりをかきて、この外は何事も見えざりければ、大方正体なきに、いよいよ煙たえ行家のありさま、（下略）

新任国司が逸早く前（先）使を派遣したことは上掲の『兵範記』の伊予国の事例に見えており、ここでは先使は守時という者で、古人ら「京童雑色等」二十人、随兵二十人を率いて出立すると描かれ、初度庁宣を在庁官人らに下し、新司の国情把握・国務掌握を推進するための遣使であつたと考えられる。こうした使者派遣はj・kの藤原為房、子忠教の事例にも看取され、いずれも国司就任後できるだけ早いうちに発遣するものであつたようである。<sup>(33)</sup>j・kによると、為房一家の場合は雑色是員という者が起用されており、彼は「疎略者」であつたが、「又有年来勞」とあり、図2に登場する雑色長や雑色と同様、国司の一家に奉仕する者が任じられたことが知られる。iは大治五年に比定され、前司任終年は後司の責務となるので、「去年」<sup>1</sup>大治四年の公物や郷保沙汰人らの得分を抑留しており、前知行国主藤原実能（左兵衛督殿）から新知行国主藤原顯頼（権弁殿）に申し入れを行い、新司の指示で抑留を解除してもらおうとしている。

1の『絵師草紙』は貧しい絵師が地方に所領をもらい、祝宴をした次の日に使者を派遣して現地の状況を把握しようとする場面を描いたもので、画面の文書の記載によると、所領は伊予国にあつたらしく、そこには既に国司の先使が下向しており、年貢を徴収してしまっていると記されている。これは鎌倉後期～南北朝期の作品ということになるが、実

際にもiのような行為があり、国司を動かすことができなかったら、先使が奪取した物実を取り戻すことは不可能であったと思われる。ちなみに、1では付与された所領が法勝寺領になってしまっており、1に描かれた状況や法勝寺との交渉が好転しない中、絵師は息子を真言宗の寺に入れ、自身も仏道を志して恨みを忘れ、この顛末を一巻の絵巻にまとめたという経緯が記されている。<sup>(34)</sup>

また先使ではないが、『今昔物語集』巻十七第五話「依夢告従泥中堀出地蔵語」には平孝義が陸奥守の時に（治安三年（一〇二二））長元元年（一〇二八）任「其ノ家二郎等ニ仕フ男コ有ケリ。実名ハ知ラズ。字ヲバ藤ニトゾ云ケル」を「検田ノ使トシテ先ニ下シ遣ル」、巻二十四第五十六話「播磨国郡司家女、読和歌語」では播磨守高階為家（承保三年（一〇七六））永保元年（一〇八一）任が侍の佐太を収納使に任じたことについて、「賤ノ郡ノ収納使ト云事ニ宛テ有ケレバ、喜テ、其ノ郡ニ行テ、郡司ガ宿ニ宿テ、可成キ物ノ沙汰ナドシテ、四五日許有テ、館ニ返ニケリ」などと描かれており、先使の出身階層や行動を推察させる材料になろう。なお、iの「郷保沙汰人等得分」は「国務雑事」24の「郷・保司佃并得分（国人・御館人）」と関連するもので、前章で見たような国除目によって前司の時に郷・保司職を得た人々の沙汰人として活動する者たちの得分のことと目される。dに「前司郎□（等カ）上下人及千余人」が退去したので、古作田の田堵がいなくなり、その年の農耕開始が遅れることが問題とされているように、前司の時の沙汰人を逸早く除去し（〔48〕も参照）、自らが国衛領を掌握するためにも前（先）使や様々な国使の活動が重要であったことが窺われる。

このように在京の国司の下から派遣された使者が国務に関与する様子は、加賀国の事例では白河・鳥羽両院の高野参詣に関連する料米進上のために侍季房を下遣するとあるのが参照され（〔16〕・〔46〕・〔49〕）、hの如くに目代やその随従者が京上したり、綱領が京進することもあるが（〔25〕・〔19〕・〔33〕）、越中国でも貢蘇使の派遣が知られる（〔47〕）。

『延喜式』巻二十三民部下「諸国貢蘇番次」によると、越中国は辰・戌年に十壺（四口は大一升、六口は小一升）を納入することになっており、翌大治五年が庚戌年であった。hに記されているように、当初は国守交替がない可能性もあったので、この時点では翌年の貢納に備えた貢蘇使決定が伝達されたものであって、右馬允平助永は都から下向して用務に従事することになる。<sup>35</sup>但し、国守改替後は当然新司が任命する者が下向することになるから、改めて新司からの連絡を待つことになるのであろう。

hに記された越中目代三善某の留任、即ち国守が交替しても国務に関与し続ける事例としては、因幡国の内藏経則が著名であり、『中右記』元永二年（一一一九）十二月二十九日条によると、彼は検非違使府生で、「数代之因幡弁済使也」、寛治五年（一〇九二）承徳二年（一〇九八）任の藤原長実の時に「申<sub>二</sub>因幡公文<sub>一</sub>之弁済使也」と記され、今回も検非違使別当藤原宗忠の子で因幡守の宗成の公文勘会に従事している。<sup>36</sup>目代では『平安遺文』二六六四号久安五年（一一四九）五月六日東大寺僧覚仁・伊賀国目代中原利宗問注記案、二六六六・六七号同年六月十三日伊賀国目代中原利宗・東大寺僧覚仁重問注記に「兼又利宗当国数代目代也」、「利宗為<sub>二</sub>目代<sub>一</sub>奉行年尚」などに見える伊賀国の例が存する。彼らはいずれも朝廷の中・下級官人で、十世紀後半頃から弁済使などの形で受領の下僚として国務に関与し始め、外記・史や受領経験者が目代になる事例も出現してくる。複雑化する文書行政の中で、円滑な国務の遂行や受領功過定の無事通過には様々な知識・文書への通曉や人脈が不可欠であり、また公卿子弟が国司になった場合には、父祖である公卿が交替手続きを援助する事例が十一世紀前後に出現している。こうした公家社会の安定、政務手続きの完成をふまえて、中央の中・下級官人と地方吏僚の同質化が進展するものと展望されるところである。<sup>38</sup>

越中目代三善某は前章で見たように加賀目代も務めていたためか、本文書の越中国関係の文書には加賀国の動向が窺われるものも少なくない。目代の勤務を重ねることで、どのような人脈や勢威形成が行われるのか、次にその一端を探



ることにした。

m半井家本『医心方』紙背文書【7】（大治五年カ）三月七日白山中宮執行大法師某書状

謹言上 案内事。右、去年申承候之後、久不下令案内申候上条、実不審巨多候。以去秋冬、令子細申思給候所、貴国御任終可令御上洛云々。仍於当国可<sub>二</sub>見参仕<sub>一</sub>之存思給候間、尚可<sub>二</sub>令還留<sub>一</sub>御上之由承<sub>レ</sub>之、喜悅不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>申尽<sub>一</sub>候。千廻々々。抑令言上<sub>一</sub>所者、去比当国前司殿御任終御沙汰哉、雖難堪候、自然無事罷過候了。而去年月迫為失火、神事料物・公物儲料等致<sub>二</sub>焼失<sub>一</sub>候、度々神事用途殆致<sub>二</sub>懈怠<sub>一</sub>、当年農作勤難方略廻候。実雖憚巨多候、依旁大事令言上<sub>一</sub>候所也。若鴻恩候者、能米四五十石許申請候、於代者以如絹可<sub>二</sub>弁申<sub>一</sub>候。依逃亡ノ重不令言上候。於□□〔今者カ〕「□□〔不カ〕顧御氣色令言上<sub>一</sub>所也。雖賀越境隔、其程不<sub>レ</sub>幾候。奉<sub>レ</sub>憑旨如山海。於自今以後候者、□同邑可<sub>レ</sub>蒙<sub>二</sub>万事仰<sub>一</sub>、又可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>申候。若恩□〔給カ〕候者、都幡津米可<sub>二</sub>申請<sub>一</sub>候。於代者如絹・米只可<sub>レ</sub>随御定候。敢不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>懈怠<sub>一</sub>候者也。随<sub>レ</sub>仰以<sub>二</sub>請文<sub>一</sub>重可□〔令カ〕言上<sub>一</sub>候也。実雖憚巨多候、御山春御祭神事近々候。又農節競□〔其カ〕期候、尤可<sub>レ</sub>蒙<sub>二</sub>御息勞<sub>一</sub>候。誠惶誠恐謹言。三月七日。中宮執行大法師（花押）。進上 越中御目代殿。」「〔賜于カ〕加賀 錢十文之送了」（異筆）

まずmは加賀国の白山中宮（中宮白山比売神社）の執行大法師から越中目代に宛てた書状で、目代の留任を慶賀するとともに、大治四年末の失火で神事料物・公物儲料が焼失し、春御祭神事や農料下行の米が準備できないという苦境を訴え、越中目代に能米四・五十石の借用を依頼する内容になっている。越中目代三善某は短期間ではあるが少し前に加賀目代を務めており、m冒頭の記述によると、その後も白山中宮と連絡を交わす関係にあったことが窺われる。隣国の支配者層・地方名士間には密接な人的・物的相互依存関係が形成されていたと指摘される所以であり、と同時に、白山中宮のような在地有力社寺でも不慮・不時の欠損の際には当国・隣国に当座の用途物借用を求めねばならない財政状況



であつたとされている。<sup>39)</sup>但し、この場合、白山中宮は代金として絹などによる支払いを条件としており、失火によつて焼亡した米倉の規模も不明であるから、あくまでも神事料や種籾用の物実としての米が用意できないという事態であつて、白山中宮の財政そのものの全体像は不明とせねばならない。前章で触れた治承・寿永内乱期の北陸道の武士の動向を見ると、<sup>40)</sup>白山宮越前馬場平泉寺の長吏職は越前斎藤氏の一族により世襲されており(図3)、隣国への依頼が可能なのは、白山信仰圈、白山の勢威の広がりを反映していると解したい(後掲史料も参照)。

ここではまた、越中国の米が加賀国の津幡津にあつたことも注目される。越中国の国津は亘理津であるが、「雖<sup>レ</sup>賀越境隔<sup>一</sup>、其程不<sup>レ</sup>幾候」と記されているように、国境の砺波山、俱利伽羅峠を下ると、加賀国加賀郡英多郷深見村の地域で、ここには九世紀前半の勝示札木簡や過所木簡が出土した加茂遺跡が検出されており、北陸道能登路への分岐点、津幡津の存在など、水陸交通の要衝であつたことがわかる。<sup>41)</sup>加賀郡には現在の金沢港に大野津もあつたが、加越国境に近接する津(都)幡津に越中国の倉庫ないしは倉米が存在したようであり、目代はその貸与を判断できるような権限を有していたと目される。<sup>42)</sup>

n 半井家本『医心方』紙背文書【38】(大治四年カ) 十二月二十九日出羽守伊岐致遠書状

俄御相博、国中定物騷候歟。然而御一家沙汰也。別事不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>候也。弘田・東八代保等事、官物農料能々御沙汰可<sup>レ</sup>候也。致遠従者其力不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>及、纔雖<sup>二</sup>申請<sup>一</sup>御免不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>候也。又弘田干損無<sup>レ</sup>術之由、度々雖<sup>二</sup>申上<sup>一</sup>、可<sup>レ</sup>申<sup>レ</sup>庁之由令<sup>レ</sup>申候、不<sup>レ</sup>申候。令<sup>レ</sup>尋<sup>二</sup>問御百姓<sup>一</sup>、実不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>堪ハ計<sup>二</sup>御沙汰<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>候也。免田開田事、無<sup>二</sup>相違<sup>一</sup>御沙汰候之由、所<sup>二</sup>悦承<sup>一</sup>也。可<sup>レ</sup>然之様可<sup>レ</sup>令<sup>二</sup>後見<sup>一</sup>給上<sup>二</sup>也。諸事期<sup>二</sup>後上洛<sup>一</sup>而已。謹言。十二月廿九日。出羽守(花押) 状。謹上 御目代殿。

次に目代の国務遂行との関連で、前章では国除目による「所知」の割り当てや沙汰人下遣にしか触れることができなかった国衙領の経営について、越中国の事例を検討する。nの出羽守は伊岐致遠という人物で(『中右記』大治四年正

月二十四日条任。「史生<sup>二</sup>下臈、依<sup>三</sup>文章生<sup>一</sup>被<sup>レ</sup>成也」とある。長承元年十一月二十三日条には五節舞姫料の一重献上を辞退したことが見える。「出羽守宗遠」とあるが、致遠のこと<sup>(43)</sup>、『平安遺文』四六七二号某年丹後国御目代宛致遠書状に登場する致遠と同一人とされている(筆跡が同じ)<sup>(44)</sup>。こちらの致遠書状の内容は「借上御庁宣事」(受領が抵当として借上に差し出した庁宣)を伝達する旨を記したもので、これは元永二年(一一一九)の文書を含む東寺本東征伝裏文書群の一通であるから、年次はその頃に比定できる。そうすると、元永元年正月十八日(保安元年(一一二〇)十一月の丹後守は藤原顕頼であることが注目され、伊岐致(宗)遠は長らく藤原顕頼に仕えていたことがわかる点も興味深い。上述の加賀守藤原家成に仕えた藤原親賢と同じく、顕頼の弟で今回の相博で越中国守になった顕長の京沙汰人の立場で、任国への指示を送付しているのであろう。また前章では親賢は佐渡守になった後には家成の京沙汰人を退任したのではないかと述べたが、致遠は出羽守就任後も顕頼の用務を担っており、これは奉仕期間・関係の密度により左右される要素も考慮すべきものの、親賢が家成への奉仕を続けた可能性は皆無ではないと訂正しておきたい。

この理解ではnの伊岐致遠は新司藤原顕長側の人間で、nはiと同様に、知行国相博の当日に新司側が早速に国衙領経営に口入したものであることになる。図1によると、前知行国主藤原公能と新知行国主藤原顕頼は姻戚関係にあり、nに「御一家沙汰也」とある通りであった。伊岐致遠は新川郡弘田保と国府所在の射水郡東八代保について「官物農料」の支給を要求しており、「致遠従者其力不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>及」とあるので、この両保は致遠の「所知」になっていたのであろう。但し、これが新司の段階で前章で触れた国除目以前に既に保司たることを予定されていたことによる行為なのか、あるいは弘田保に関して「又弘田干損無<sup>レ</sup>術之由、度々雖<sup>三</sup>申上<sup>一</sup>、可<sup>レ</sup>申<sup>レ</sup>庁之由令<sup>レ</sup>申候、不<sup>レ</sup>申候。令<sup>レ</sup>尋<sup>三</sup>問御百姓<sup>一</sup>、実不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>堪ハ計<sup>三</sup>御沙汰<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>候也」と述べ、相博前から両知行国主の關係により、前知行国主藤原公能の段階から「所知」を認められていたのか、二様の理解が可能であると思われる。

nは相博の当日に発給されていること、「諸事期」後上洛「而已」と、この時点では目代三善某が退任・上京するものと考えられており、新司側の情報を把握していないことなどを考慮すると、後者の蓋然性が高いと言えよう。即ち、nの時点では致遠が新司藤原顯長の京沙汰人として活動していた訳ではないと解さねばならない。また前章で見た加賀国と同様、「所知」を認める範囲は国司の一族や国務関係者だけではなく、広く姻戚や職務上のつながりに基づき、そうした人々に随従する者にも及んでいることがわかり、興味深い。nでは目代三善某の残務処理として農料の下行や免田開田の「後見」が要請されているのであり、国衙領の経営や民政面に果す目代の役割・権限の大きさが窺われる。目代三善某と伊岐致遠は同様の階層に属し、こうした中・下級官人相互のつながり、相互の融通も時に歴史を動かす一齣として留意しておきたい。

o 半井家本『医心方』紙背文書【42】年未詳十二月十八日散位藤原某書状

案内申<sup>天</sup>候也。守殿御教書参せ候、在所山法師と申使也。如<sup>レ</sup>此ほうさいにん□〔はカ〕庄園・公郷不申候者也。おほうけの事二不<sup>レ</sup>候之大事発<sup>天</sup>如<sup>レ</sup>此以申候、只可<sup>二</sup>御邊迹<sup>一</sup>候者也。件ちん共罷越候□〔者カ〕、国兵士相具して〔天カ〕加賀さかゐまで□〔はカ〕／送<sup>天</sup>可給候。又恒貞と申ちん候、それは先年二女かとうて罷越<sup>天</sup>候□〔也カ〕。貞末丸かかとゐする女も恒貞丸か妻乃おと、にする。然者恒貞丸ヲえんにし罷越<sup>天</sup>候者也。且ハ又此次<sup>天</sup>可<sup>レ</sup>蒙<sup>二</sup>御恩<sup>一</sup>之候。恐々謹言。十二月十八日。散位藤原（花押）。進上 越中御飯目代殿。

p 半井家本『医心方』紙背文書【45】年月日未詳散位藤原某書状（oと同筆）

上啓 案内事。右、所<sup>二</sup>令<sup>レ</sup>申候<sup>一</sup>者、年新候天寔方々御悦共承、神妙不可思儀候事也。抑件助遠と申人者諸々非常之人也。それかおとりとしていつれのやつはらとまかりあつまり候也。慥助実か妻子・恒貞丸妻、任<sup>二</sup>道理<sup>一</sup>可<sup>二</sup>罷預<sup>一</sup>候者也。貞末并妻者給候了。如<sup>レ</sup>此御沙汰すな〔みカ〕やかに御沙汰候天給御□事悦思給候也。

o・pは同筆で、pは大治五年正月の文書と目され、oに越中国守または知行国主（「御教書」とある）を「守殿」と称しており、内容としては「加賀さかる」や人々の罷越しを述べていることから考えて、加賀国側から越中目代に宛てたものと思われる。oでは「在所山法師」が登場し、これは「ほうさいにん」（謀罪人か）とも記されており、延暦寺の山法師か、加賀国白山の僧兵であろう。白山が武力を有していたことは、治承元年（安元三＝一一七七）の「鹿ヶ谷事件」と前後して問題になった、西光（藤原師光）の子加賀守近藤（藤原）師高とその弟で目代の師経らと白山の紛擾（安元事件）の際に、「白山三社八院の大衆ごとく起りあひ、都合其勢二千人、同七月九日の暮方に、目代師経が館ちかうこそおしよせたれ」とあることなどに窺われる（『平家物語』卷一「俊寛沙汰鵜川軍」）。oは前欠のため、正確な状況は不明であるが、加賀白山の山法師が越中国に罷越したら、国兵士を差遣して加賀国境まで送り返して欲しい旨を伝達したものと解され、当該期に問題となる僧兵の動向の一端が看取される<sup>45</sup>。

o後半部・pも前後の事情は不詳であるが、越中国で勾引きを犯した者たちが加賀国に罷越している状況、関係者の一部を捕獲したことを伝達するもので、pに「抑件助遠と申人者諸々非常之人也」とあるのは加賀側の人間であるようにも解され、加越国境を越える人々の結合・往來の様子を知る材料となる。それ故に国務の実務担当者は相互に連絡を交わし、幾分なりとも広域的な問題に対処することが必要であった訳である。加賀国の「国務雑事」89に「國中惡人勸善事」とあるのは、こうした犯罪人の動向、治安維持に関わる事項の報告を求めたものかもしれない<sup>46</sup>。oには「国兵士」が見えており、目代はこうした武力を駆使することが可能であり、検断・軍事力の掌握においても国衙機構を統括する権能を有していたことが知られる。

以上を要するに、越中目代三善某は様々な人的関係、朝廷や隣国との通交をふまえ、地方統治の実務に従事していた次第である。そこにはoの「国兵士」のような国衙機構を支える在地勢力の協力・統制が不可欠であり、最後に前章で

も保留しておいた在庁官人など在地の人々の動向を検討することにした。ちなみに、目代三善某の在地での勢威扶植は不明であるが、讃岐国の事例では父子で目代を務めた者の一族と目される人物が治承・寿永内乱期に在庁官人らを統括し得る関係を築いていたことがわかる。<sup>(47)</sup>

q 『吾妻鏡』元暦元年（一一八四）九月十九日条

平氏一族、去二月被<sub>レ</sub>破<sub>二</sub>摂津国一谷要害<sub>一</sub>之後、至<sub>二</sub>于西海<sub>一</sub>、掠<sub>二</sub>虜彼国々<sub>一</sub>。而為<sub>二</sub>攻襲<sub>一</sub>之、被<sub>レ</sub>発<sub>二</sub>遣軍兵<sub>一</sub>詔。以<sub>二</sub>橘次公業<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>一方先陣<sub>一</sub>之間着<sub>二</sub>讃岐国<sub>一</sub>、誘<sub>二</sub>住人等<sub>一</sub>、欲<sub>二</sub>相具<sub>一</sub>、各令<sub>二</sub>帰伏<sub>一</sub>、構<sub>二</sub>運忠於源家<sub>一</sub>之輩、注<sub>二</sub>出交名<sub>一</sub>。公業依<sub>二</sub>執進<sub>一</sub>之、有<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>。於<sub>レ</sub>今者、彼国住人可<sub>レ</sub>隨<sub>二</sub>公業下知<sub>一</sub>之由、今日所<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>也。（下略）

r 香川県大川郡大内町水主神社所蔵・水主神社大般若経函底書（二百の内九秩）<sup>(48)</sup>

一 国司御神拜事。粗記之。（中略）一 二条院御宇。国司藤原秀能、兵衛佐七条三位殿、内蔵頭俊盛御息、応保三年正月廿四日任。御神拜御目代橘馬大夫公盛勤<sub>レ</sub>之。長寛元年十月廿七日（甲申）。次御神拜目代右衛府橘公清勤<sub>レ</sub>之。公盛御息男也。仁安二年十月廿五日（己未）。自<sub>レ</sub>此以後ハ相統不<sub>レ</sub>註<sub>レ</sub>之。（下略）

q の讃岐国では国府周辺を拠点とする有力在庁官人らが反平家の行動をとったが、これは平家が都落ちから体勢を挽回して摂津まで拠点を戻した元暦元年二月頃のこと、能登守平教経に撃破され、逃走した淡路でもさらに敗退してしまふ。彼らは畿内に逃げ込むという仕儀になり、進軍してきた頼朝軍に帰属したもので、彼らの統括を委ねられたのが純友の乱平定に功があった橘遠保を祖とする畿内の中小武士団で、奥州合戦後に出羽国に所領を与えられた小鹿島橘氏の公業であった。r によると、この橘氏の一族は長寛元年（一一六三）、仁安二年（一一六七）に橘公盛―公清が讃岐目代であったことが知られ、讃岐国はその後平氏の勢力が及び、国府周辺の人々は平家の抑圧に苦しむことになる。公業は通字から考えて、公盛―公清の一族と目され、具体的な関係は不明であるが、頼朝が公業に讃岐国の源氏方の統括

を命じたのは、目代就任を契機に小鹿島橋氏が築いてきた人脈を認めてのことと思われる。したがって本文書群などに窺われる目代の勢威も、こうした状況につながる先蹤となるものであり、目代のあり方を考究する具体的材料として重要である点に改めて留意しておきたい。

### 三 在地勢力の動向

ここで再び加賀国関係の文書に戻り、越中国の知見も加味しながら、先に保留した在地勢力との関係如何を見ていく。まず第一章でも触れた院領莊園設置に伴う紛擾を検討したい。

s 半井家本『医心方』紙背文書【35】 大治二年八月二十八日額田庄寄人等解

「不用也」(端書・異筆)。額田御庄寄人等解 申進申文事。依<sub>レ</sub>実注進御服綿・御地子米代八丈絹并雜事子細□。副進注文一通。右、御服綿・三斗米代八丈絹、雖<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>限<sub>二</sub>進濟期<sub>一</sub>、前預所相模前司於<sub>二</sub>御服等<sub>一</sub>者、調儲可<sub>レ</sub>相<sub>二</sub>待沙汰人下向<sub>一</sub>□由、所<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>也。随相<sub>二</sub>待沙汰人下向<sub>一</sub>之處、今亦有<sub>レ</sub>仰。仍相<sub>二</sub>待沙汰人<sub>一</sub>、御服年貢可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>進濟<sub>一</sub>也。御庄所□并有様子細注<sub>二</sub>別紙<sub>一</sub>之所<sub>二</sub>進上<sub>一</sub>也。抑御庄立券当□於<sub>二</sub>年貢御服<sub>一</sub>者、可<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>本院御庄例<sub>一</sub>之由、雖<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>□<sub>一</sub>(仰カ)下<sub>一</sub>、預所相模前司非例有<sub>二</sub>其数<sub>一</sub>。為<sub>レ</sub>訴<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>裁許<sub>一</sub>過□。於<sub>レ</sub>今者為<sub>レ</sub>蒙<sub>二</sub>裁定<sub>一</sub>、注<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>言上如<sub>レ</sub>件。以解。大治二年八月廿八日。番頭等、三国豊□(用力)、江沼正□(元カ)、紀貞国、物部依□(国力)、足羽吉□(久カ)、平国時、江沼依□(行カ)、／平助道、別包任、大江公政。案主大江経□(定カ)。

t 半井家本『医心方』紙背文書【37】 大治二年八月日加賀国江沼郡諸司等解

江沼郡諸司等解 申請 留守所御下文事。壹紙(被<sub>レ</sub>載)下可<sub>レ</sub>停<sub>二</sub>止京上<sub>一</sub>事<sub>上</sub>。右、今月九日留守所御下文 到来備、



以<sub>レ</sub>「先日」雖<sub>レ</sub>有<sub>下</sub>申<sub>上</sub>「請京上暇<sub>上</sub>、依<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>其撰<sub>一</sub>、不<sub>二</sub>免給<sub>一</sub>、而何背<sub>二</sub>下知之旨<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>上洛<sub>一</sub>哉。早可<sub>レ</sub>停<sub>二</sub>止件京上<sub>一</sub>者。謹所<sub>レ</sub>請如<sub>レ</sub>□〔件カ〕。抑依<sub>二</sub>諸司等訴切<sub>一</sub>、始<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>去春時<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>留守所<sub>一</sub>進<sub>二</sub>上申文<sub>一</sub>兩度也。件申文不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>京者<sub>一</sub>、条々訴裁許不<sub>レ</sub>明也。是已<sub>レ</sub>留守所不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>進止<sub>一</sub>歟。須<sub>下</sub>不<sub>レ</sub>蒙<sub>二</sub>裁斷<sub>一</sub>之剋<sub>上</sub>、雖<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>參洛<sub>一</sub>之、春ハ勵<sub>二</sub>農業勤<sub>一</sub>、夏ハ令<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>交易物弁済<sub>一</sub>之。此ニ事頗勤畢、不<sub>レ</sub>至<sub>二</sub>収納之期<sub>一</sub>、此及<sub>二</sub>尤中間<sub>一</sub>也。何人民身暇可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>物惜<sub>一</sub>哉。但以<sub>二</sub>留守御威<sub>一</sub>、惣郡司職可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>□〔解カ〕任<sub>一</sub>者、諸司等京上有<sub>二</sub>何益<sub>一</sub>哉。裁否分明<sub>一</sub>也者、捨<sub>二</sub>命根<sub>一</sub>欲<sub>レ</sub>蒙<sub>二</sub>国裁<sub>一</sub>所<sub>二</sub>參洛<sub>一</sub>也。田舎<sub>一</sub>（也以下十五字紙繼目ニアリ）／者無<sub>レ</sub>故欲<sub>レ</sub>企<sub>二</sub>京上<sub>一</sub>事、被<sub>レ</sub>垂<sub>二</sub>邊迹<sub>一</sub>矣而已。以解。大治二年八月 日。前掾大江（花押）。菅波郷司散位大江（花押）。山代郷司散位大江（花押）。南郷司散位大江（花押）。額田郷司散位藤原（花押）。

s・tは江沼郡の額田御庄に關係するもので、この莊園は白河院領、加賀守藤原家成の前司で、院近臣として知られる閑院流の藤原季成の時に立莊されたと目される。sでは前預所相模前司（源有兼の行為が指彈されているが、有兼は『御産部類記』元永二年（一一一九）三月十五日条に中宮藤原璋子（待賢門院）が鳥羽院若宮（顯仁＝崇徳）出産に際して七瀬祓の使者に任じられたことが知られ、『長秋記』同年三月二十一日条では源有仁が閑院流藤原公実の女と結婚した時に、『相模前司有兼可<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>吉書<sub>一</sub>之由有<sub>二</sub>議定<sub>一</sub>」と見えるので、閑院流の家司を務めていたのではないかと考えられている。sの番頭には江沼郡の譜第郡領氏族江沼臣の系譜を引くと思われる江沼姓の者、三国・物部・足羽・別など北陸道の古代豪族氏姓の人々が散見するが、tによると、当該期の江沼郡では額田郷以外は大江氏が郷司になっており、残る忌波郷司はsの大江公政、郡家郷司は大江経定に比定する見解が呈されている。<sup>54)</sup>大江姓は外来の氏族であることを示し、十一世紀頃に畿内から到来して土着したものとされる。<sup>51)</sup>

額田御庄は旧郡家所在地たる郡家郷に莊家が設定されたもので、さらに国衙領に雑役免の加納を展開したため、sの



如き紛擾が生じ、tで江沼郡諸司等が上洛の企図を示しつつ、留守所による裁断を求めているのもこの案件に関わるものであって、国司交替の時宜をとらえて、在地側の要求、国衙領の回復を実現しようとした行為であったと解せられる。表2の加賀国芹田郷も郡家比定地で、院勢力が在地社会に浸透する上で、郡家所在郷を利用すべき意義が存したと指摘される所以である。<sup>(52)</sup>大江氏はまた、在庁官人として鎌倉時代にも勢威を有していることが知られる。<sup>(53)</sup>即ち、上述の安元事件の際に、延慶本・長門本『平家物語』や『源平盛衰記』所載の安元三年（一一七七）二月九日留守所牒には源朝臣・大江朝臣・財（財部）朝臣が並置され、『延慶本平家物語』第四「卅七法皇五条内裏より出させ給て大膳大夫業忠が宿所へ渡せ給事」末尾の寿永二年（一一八三）五月付白山宮宛勸農使等連署奉免状の目下には橘朝臣・大江朝臣が見えており、彼らが鎌倉殿勸農使比企藤内朝宗に協力して国内の統治に努めていた様子が窺われる。橘氏は南北朝時代にも在庁官人の「介」を称して存続しており、国衙近辺の能美郡能美庄の惣公文職と庄鎮守八幡宮神主職を継承し、白山に施入を行うなど、同様に鎌倉時代（以降）にも活躍している。<sup>(54)</sup>

では、額田御庄設置と在庁官人・郡郷司らとの関係は如何であろうか。s・tで大江氏らが前預所を非難しているところからは、院領荘園は在地勢力を排除する形で推進されたものと目される。この点に関連して、tの「前掾大江」は在庁官人の一角を占める有力者で、江沼郡の惣郡司職にもあったが、額田御庄の加納の展開・安定のためにはこの掾大江を解任、国衙機構内での江沼郡在地勢力を削減することが不可欠であり、国守（国衙）と郷司の媒介者としての惣郡司職の停任に至ったのではないかとする指摘に注目したい。<sup>(55)</sup>第一章で触れた江沼郡勸農使飛驒前司＝藤原景実の派遣も、閑院流の人脈による起用であり、越前国の武士団につながる武力保有者の活動によって、大江氏ら加賀の在来者たちを押さえ込むとする方途であると思われる。

sの端書には「不用也」とあり、sは握りつぶされてしまったらしく、また年末詳六月七日散位藤原某書状（20）

では「額田御庄檢注、庁官知貞、是遷替所申文に加判之人歟。頗不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>心之様思食□〔てカ〕候也。若同名他人歟」と述べるものの、年末詳六月二十六日散位藤原某書狀〔44〕には「知貞事。右、於<sub>レ</sub>今者御庄実檢了。早任<sub>三</sub>御下文旨、可<sub>下</sub>令<sub>下</sub>致<sub>三</sub>沙汰<sub>一</sub>給<sub>上</sub>歟。若事次候者、以<sub>三</sub>此旨<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>令<sub>三</sub>言<sub>上</sub>候<sub>一</sub>とあるので、新司側は前司（遷替所）の行為を認めていると解される。<sup>56)</sup>したがって閑院流とも姻戚関係にある藤原家成の任中においては、彼ら在庁官人の企図は実現せず、なおしばらくは雌伏を余儀なくされたものと推察される。その後の推移は不明であるが、いずれかの時点で（平氏の台頭などが契機か）大江氏も妥協・復活しており、在庁官人の地位を維持している。ただ、こうした在地勢力が鎌倉幕府と結合していくのは、朝廷との利害相反・不信を経験したことが要因になっているとも考えられよう。

u 半井家本『医心方』紙背文書〔19〕）年末詳五月十日散位藤原某書狀

供御夫領下遣候、甘葛煎解文内一瓶已未進。然而無<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>所<sub>二</sub>下遣<sub>一</sub>也。不審候事也。毎<sub>レ</sub>事度々令<sub>レ</sub>申候了。恐々謹言。五月十日。散位藤（花押）狀。謹上 御目代殿。

v 半井家本『医心方』紙背文書〔33〕）年月日未詳散位藤原某書狀

度々解狀事。（中略）一番役人事。右、於<sub>三</sub>国舍人<sub>一</sub>者、無<sub>二</sub>御用<sub>一</sub>者、所<sub>二</sub>返遣<sub>一</sub>也。一供御夫領書生秋忠事。右、供御一瓶未進之上、不<sub>レ</sub>致<sub>三</sub>其之沙汰<sub>一</sub>。又不<sub>レ</sub>差<sub>二</sub>別供御<sub>一</sub>。旁懈怠之太、責而有<sub>レ</sub>余。尤可<sub>レ</sub>加<sub>レ</sub>誠事也。一糸・綿事。（後欠）w 半井家本『医心方』紙背文書〔22〕）年月日未詳親賢奉書札紙書

重仰云、国侍・国雑色・国舍人、得替之時縮<sub>二</sub>人数<sub>一</sub>、是定例也。謹〔慥カ〕尋<sub>三</sub>本数并子<sub>一</sub>□〔孫カ〕、可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>注<sub>三</sub>進來名<sub>一</sub>者。謹狀。親賢奉。

以上のs・tでは大江氏らの反目を見たが、国務運営には在地勢力の存在が不可欠であり、そうした側面が看取される事例も存する。uの甘葛煎は『延喜式』卷三十三大膳下・「諸国貢進菓子」にいくつかの国々とともに加賀国も貢進

国の一つとして見え、これらは「随<sub>レ</sub>到檢収附<sub>二</sub>内膳司<sub>一</sub>」。但甘葛煎直進「藏人所」と規定されるものであった。加賀国から中央に進上する物実に関しては、守藤原家成も随行した白河・鳥羽院の高野参詣料に関わる運米三百斛のように、中央から待季房を派遣したり、雑色を綱丁として下遣したりして運搬する場合もあるが〔16〕・〔46〕、式制に規定されているような通常の貢進物は「国務雑事」20に見える加賀国の綱丁が運んだものと思われ、主計上式の中男作物の海藻に関連する「稚海藻供御綱丁」〔25〕は国元から差遣されたのであろう。<sup>(57)</sup>「国務雑事」73には「京上夫事（夫領料、夫功）」が見えるが、vによると、sの供御夫領は書生、即ち国書生の秋忠という人物で、ここでは一瓶の未進が叱責されており、綱領郡司と同様に、国衙の在庁官人の中心的役職である書生・判官代クラスの人々が徴税の実務を支えていたことがわかる。<sup>(58)</sup>「国務雑事」85の「庁官書生員数事」等、国内の諸勢力の掌握に分類した諸項目に留意された所以である。

x 『高山寺本古往来』

(五) 謹言。被<sub>レ</sub>差<sub>二</sub>定京上官米押領使<sub>一</sub>之由、只今從<sub>二</sub>税所判官代許<sub>一</sub>申來。松影寔雖<sub>二</sub>武者子孫<sub>一</sub>、專不<sub>レ</sub>繼<sub>二</sub>其業<sub>一</sub>之上、年老身貧不<sub>レ</sub>備<sub>二</sub>一人隨兵<sub>一</sub>。若非<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>常臨<sub>二</sub>事<sub>一</sub>、必可<sub>レ</sub>招<sub>二</sub>嘲哂<sub>一</sub>歟。早被<sub>二</sub>申停<sub>一</sub>者。天幸、謹言。

(六) 謹言。被<sub>レ</sub>示<sub>二</sub>渭米押領使<sub>一</sub>之事洩<sub>二</sub>啓於国前<sub>一</sub>已了。則被<sub>レ</sub>仰云、代々為<sub>二</sub>運米押領使<sub>一</sub>勤<sub>二</sub>仕公事<sub>一</sub>之由、郡司・書生之間有<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>伝言<sub>一</sub>。仍所<sub>二</sub>撰定<sub>一</sub>也。敢不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>対捍<sub>一</sub>。但至<sub>二</sub>于從兵<sub>一</sub>、諸郡兵船苟有<sub>二</sub>其員<sub>一</sub>。既謂<sub>二</sub>將軍<sub>一</sub>豈不<sub>レ</sub>隨<sub>二</sub>其命<sub>一</sub>哉。速以<sub>二</sub>此趣<sub>一</sub>重仰遣者。国宣如<sub>レ</sub>此、乞也悉<sub>レ</sub>之。謹言。

x は十世紀末〜十一世紀半ばの国務運営の様相を知る材料であるが、京上官米押領使の選定に際しては、国司は郡司・書生の推挙に依存しており、税所判官代という在庁官人の上首者が差定の旨を伝達している。x―(五)は「武者子孫」の松影からの書状で、x―(六)は「洩<sub>二</sub>啓於国前<sub>一</sub>」、国宣による指示を伝達する点や郡司・書生より上位の者が発給

したものと解される点などから考えて、目代が松影の辞退に対して返信を記す体の書状になっていると思われる。とすると、目代の任務遂行にはこれら在地勢力の掌握が不可欠であり、また松影の如き「武者子孫」<sup>60</sup> 代々武力を扶植してきた国内武力の担い手を差発し得ることも重要であつた。ここではまた、武者が「武者子孫」という譜第性を以てその動向・生誕を国衙に把握されていたことにも注目され、『時範記』承徳三年（一〇九九）三月十九日条に因幡守平時範が引率した館侍（弁侍）の他に国侍が見えているように、国司による国内の武力、国衙軍制の統括の要諦であらう。「国務雑事」にも12「国雑色事」、13「国侍事」、44「国舍人数事」などの注進が求められている次第である。

では、こうした国内武力を国衙はどのようにして管理していたのであろうか。また在京の国守との関係は如何であつたのか。この点に関連して、v・wには正に国舍人や国雑色・国侍に関する事項が記されていることが注目される。vによると、国舍人は「番役人」とあり、「無御用者、所返遣也」と伝達されているので、加賀国から上洛して番上する形で在京の国守に奉仕していたのでないかと考えられるところである。『今昔物語集』卷三十第四話「中務太輔娘、成近江郡司婢語」は時代設定不明、かつ郡司の事例であるが、近江国から「長宿直」で郡司の子が上京する様子が描かれており、国舍人の上京・都での暮らしぶりを推察させる材料になろう。wではx—(五)の「武者子孫」と同様に、国侍・国雑色・国舍人の「子□〔孫カ〕」に言及されており、彼らが譜第性を以て把握される存在であつたことがわかるとともに、ここではその人数の縮減のために「本数并子□〔孫カ〕」や夾名の注進が指示されている。

十一世紀末〜十二世紀前半においても、史料gや『中右記』保安元年（一一二〇）二月二十九日条「因幡守宗成戌刻許上洛也。国人右近大夫経俊以下卅人許送来。任終国司国人送来、是依不行非法事、自成甘党之詠。各仰感悦之由了」などのように、国人が国司、特に任期が終了したり、死去したりして当該国と所縁がなくなった者に随従することは想定されておらず、そもそも国司と国人には一定の緊張関係が存した。『時範記』承徳三年二月十五日条

で因幡守平時範の入境を迎えた在庁官人らは「称<sup>レ</sup>前官人以下<sup>レ</sup>称<sup>レ</sup>籍」とあり、在庁官人の編成や「所」の上首者の任命は国司交替毎に行われるべきものであるが、「国務条々」第二十七条に「一不<sup>レ</sup>可<sup>三</sup>輒解任<sup>二</sup>郡司・雑色人<sup>一</sup>事」と記されているように、時範も国府所在の法美郡を拠点とする有力豪族伊福部臣氏の人々を中心に、既存の在地秩序を保持する形で臨んでいる。<sup>(61)</sup> 地方豪族がトネリなどとして朝廷に上番することは古来行われており、当該期にも相撲人として供節を重ね、近衛府とつながりを持つ例が知られ、上掲『中右記』の右近大夫経俊は伊福部臣氏出身の相撲人で、右近衛との関係で五位叙爵に与った者と推定される。<sup>(62)</sup> しかし、遷任する国司が関係を維持するのは稀有であり、武者的受領においてはいくつかの郎等関係の形成・継続が窺われるところである。<sup>(63)</sup>

ところが、院政期には、『十訓抄』第一「可<sup>レ</sup>施<sup>二</sup>人恵<sup>一</sup>事」(一一四一)に「肥後守盛重は周防の国の百姓の子なり」とある藤原盛重は、六条右大臣源顕房の家人で周防国目代になった者が見出して都へ連れ帰り、やがて顕房↓白河上皇に仕えて、『平家物語』巻一「俊覚沙汰鵜川軍」に「北面は上古にはなかりけり。白河院の御時、はじめ置かれてより以降、衛府どもあまた候けり。為俊・盛重、童より千手丸・今犬丸とて、是等は左右なききり物にてぞありける」と評されるような能力を発揮する例が出現する。上述の西光(藤原師光)も阿波国の在庁官人出身であり、平正盛・忠盛が備前守を務めたところから、平家の有力家人となる備前の難波氏や備中の妹尾氏との関係が形成される事例などを指摘することができ、<sup>(64)</sup> 国司と任国の国人との密接なつながり、国司による国人の役仕・登用が展望されるところとなる。特に院近臣は中下級貴族で、摂関期に受領になった高級貴族の子弟のような家政機関による国務運営・交替事務の補助は期待できないから、武者的受領と同様に、自らの人脈形成に努める必要があり、在地勢力との結合、彼らの京上が実施され、中央と地方の距離が接近していくという側面が生じたものと考えられる。

Y『玉葉』安元三年(治承元)一一七七)五月二十三日条

（上略・天台座主明雲を伊豆に配流）頼政朝臣知行伊豆国。仍下向之間、可<sup>レ</sup>付<sup>二</sup>国兵士<sup>一</sup>之由、去夜半被<sup>二</sup>仰下<sup>一</sup>。然而殊恐<sup>二</sup>山僧濫行<sup>一</sup>、可<sup>二</sup>守護<sup>一</sup>之旨不<sup>レ</sup>被<sup>二</sup>召仰<sup>一</sup>云々。仍遣<sup>二</sup>異樣郎從一兩<sup>一</sup>、敢不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>存<sup>下</sup>可<sup>二</sup>奪取<sup>一</sup>之由<sup>上</sup>云々。今日召<sup>二</sup>頼政<sup>一</sup>、有<sup>二</sup>勘責之仰等<sup>一</sup>云々。以<sup>二</sup>此趣<sup>一</sup>披陳云々。（下略）

z『清辨眼抄』所引「後清録記」安元三年五月二十三日条

廿三日壬戌、天晴。前座主領送使并国兵士（五六騎云々）相具下向。而衆徒二千余人許、行<sup>二</sup>向勢多橋西辺<sup>一</sup>、奪<sup>二</sup>取座主<sup>一</sup>登<sup>レ</sup>山了。于<sup>レ</sup>時多田藏人行綱・大夫尉兼綱雖追朝（期イ）事歟。

国衙機構による国内武士役使の状況は、史料oに加越国境を越え越中国に進出する「在所山法師」を越中国の国兵士によって加賀国境まで送還して欲しいという記述があることに看取される。oはあくまでも国内での国兵士の活動であるが、各国で目代が国兵士を徴用し得る立場にあると考えられていたことがわかる（『吾妻鏡』治承四年八月二十五日条などの駿河国目代橘遠茂の事例も参照）。そして、y・zの安元事件の一齣である天台座主明雲の配流と叡山大衆による奪回は、伊豆配流が決定した明雲護送のために、伊豆国の国兵士が上京し、専使部領の形で下向することになっていた。yによると、国兵士差遣は伊豆守源頼政に令されたが、摂津源氏である頼政に特に守護すべき旨は指示がなされなかったので、頼政は「異樣郎從」、おそらくは正規の郎等ではない者を一・二人つけただけであつたため、大衆に明雲を奪取されてしまい、勘責を被つたと記されている。武者的受領である頼政は独自の武力、郎等を組織化していた筈であるが、ここでは国司の役割として国兵士を差発し、中央でも活動させることができた点に注目したい。

周知のように、保元の乱の際に、平清盛が伊勢・伊賀や上述の備前・備中の家人を引率したのに対して、源義朝は坂東諸国を中心に東国の様々な武士団を随従していた（『保元物語』上「主上三条殿二行幸付官軍勢汰へノ事」）。かつては源頼信以来の河内源氏の坂東進出や頼義・義家との前九年・後三年合戦による結合、就中義家段階での武士の棟梁化



表3 保元の乱勃発時の坂東国司

伊豆守：藤原経房…保元3年判官代（10歳）  
甲斐守：藤原盛隆…葉室顕隆の孫、顕時の子  
相模守：藤原親弘…親賢の孫親忠（美福門院御乳父）の子  
武蔵守：藤原信頼  
安房守：平義範  
上総介：源資賢…宇多源氏、後白河院郢曲御師（『尊卑分脈』4-148）  
下総守：？  
常陸介：平頼盛…清盛の異母弟  
上野介：藤原重家…兄宗綱が後白河院北面（『尊卑分脈』2-455）  
下野守：源義朝

が喧伝されたが、義家の時点では坂東武士を広く家人化することはできておらず、源氏家人の形成は義朝の段階にあり、むしろ鎌倉幕府成立以後に作られた「神話」であって、頼朝の蜂起への参画も、既存の主従関係というよりも、その時点で彼らがそれぞれに反平家に加担せざるを得ない状況に置かれていたという要因が大きく、それが治承・寿永内乱が全国化する原因であったと考えられている。<sup>(65)</sup> 義朝が「私ノ合戦ニハ、朝威ニ恐テ、思様ニモ振舞ハズ。今、宣旨ヲ蒙テ、朝敵ヲ平ゲ、賞ニ預ラン事、是家ノ面目也」と揚言しているように、義朝自身が下野守であり、保元の乱の際の坂東諸国司は故鳥羽院・後白河天皇方と目される者が多く（表3）、天皇方の宣旨により国衙を介した徴発・恩賞の約束があったからこそ、彼らは義朝の旗下に結集したものと解される（したがってそのような要素がない平治の乱では「源氏家人」は徴収できなかった訳である）。<sup>(66)</sup>

またもや論が本文書群の考察から離れてしまったが、以上を要するに、v・wの国舎人はこうした任国の武士を在京の用務に駆使、上番させる事例として注目される。その背景には知行国制や荘園公領制の成立に伴う中央と地方の交流頻繁化、王家・摂関家がそれぞれに権力基盤を確立したり、院近臣たる中下級貴族が国守として国務遂行の円滑化や院への奉仕のために在地勢力と対立・相互依存したりする状態が交錯する状況があったと思われる。地方武士が朝廷の警備を担当する内裏大番制は、白河院政期に成立すると目されており、各国単位に国司が責任者となつて、



三年間在京して警固に従事させる方式である。<sup>(67)</sup>これは平氏政権下でさらに整備が進み、平家による平氏家人の組織化にも利用されているが、実際にも治承・寿永内乱勃発時に在京していた坂東武士は多かった。<sup>(68)</sup>さらに鎌倉幕府では京都大番役や鎌倉番役が御家人統制に大きな役割を果たしたのは周知の通りであろう。こうした端緒を考える上で、本文書群の国舎人や国兵士の動向は重要であると言える。

v・wではまた、国司交替に伴うその異動が検討されており、「得替之時、縮<sup>二</sup>人数<sup>一</sup>、是定例也」という認識が示されている。これは「国務条々」とは異なる考え方であり、国司交替による在庁官人、国内武士の勢力変動が起こり得るとすれば、在地秩序の変貌につながり、地方での対立激化、対立が都にまで持ち込まれる現象を生み出し、社会全体の不安定につながる要因になっていくものと思われる。本章冒頭で紹介した院領莊園の設定とそれに伴う在地勢力の排除・対立惹起や他国の武力保有者の進出などの様相ともども、十二世紀後半の紛擾につながる要素の萌芽形態として留意したい。

本文書群から窺われる在地勢力の動静は以上の如くであり、それらを敷衍して少し後の様相を展望した。国司交替に伴う諸行事の一環にこうした在地勢力とその行方をかきまみることができるのは貴重であり、本文書群の知見を他の国々での分析にも活用することを課題として、本章の考察を終えたい。

## むすびにかえて

小稿では半井家本『医心方』紙背文書中の加賀国・越中国関係の文書を中心に、十二世紀前半の国司交替のあり方や継起する諸問題に言及した。当該期の国衙の様相を文書によって究明することができるのは稀有の素材であり、白河院

政末期・鳥羽院政始期という院政が本格化する段階の、しかも院近臣が関係する国務の様態を具体的に考察し得るのは有意義である。

本文書群にはまた、十二世紀後半、治承・寿永内乱に帰着する問題の萌芽を窺うことができ、なお課題である治承・寿永内乱に至る諸勢力のあり方を検討する糸口ともなる。加賀国・越中国に関する知見とともに、まだ着手できていない国々の国衙関係者・在庁官人の個別的な考究を課題とし、蕪雑な稿のむすびにかえたい。

## 註

- (1) 拙稿 a「国書生に関する基礎的考察」、b「国務運営の諸相と受領郎等の成立」、c「因幡国伊福部臣古志」と因幡国の相摸人小考」、d「古代土佐国・讃岐国の相摸人」、e「古代常陸国の相摸人と国衙機構」、f「古代阿波国と国郡機構」(『在庁官人と武士の生成』吉川弘文館、二〇一三年)、g「平安・鎌倉時代国衙関係者・在庁官人表(稿)」(『平安・鎌倉時代の国衙機構と武士の成立に関する基礎的研究』平成二十一年度(平成二十三年)度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書(研究代表者・森公章)、二〇一二年)など。
- (2) 十一世紀末〜十二世紀前半の国務運営の要諦に関わる『朝野群載』巻二十二「国務条々」については、生島修平・染井千佳・森公章「『朝野群載』巻二十二「国務条々」校訂文(案)と略註」(『白山史学』四六、二〇一〇年)を参照。
- (3) 瀬戸薫 a「半井家本『医心方』紙背文書とその周辺―善勝寺流藤原氏を中心に―」、山本信吉・瀬戸薫「史料紹介 半井家本『医心方』紙背文書について」(『加能史料研究』四、一九八九年)、戸田芳実「院政期北陸の国司と国衙」(『初期中世社会史の研究』東京大学出版会、一九九一年)、五味文彦 a「紙背文書の方法」(『中世をひろげる』吉川弘文館、一九九一年)、b「武士と文士の中世史」(東京大学出版会、一九九二年)、安原功「院政期に加賀国における院勢力の展開」(『ヒストリア』一三六、一九九二年)、本郷恵子「中世文書の伝来と廃棄」(『史学雑誌』一〇七の六、一九九八年)、佐藤泰弘「清胤王書状群と言上状」(『日本中世の黎明』京都大学学術出版会、二〇〇一年)、瀬戸薫 b「『医心方』紙背文書の世界」(『金沢市史』通史編一、二〇〇四年)、吉永壮志「平安時代後期における目代の具体像―半井家本『医心方』紙背文書の検討から―」(『待兼山論叢』四五、二〇一一年)など。
- (4) 五味註(3) b 書八四頁。
- (5) 瀬戸註(3) a 論文。
- (6) 大津透「平安時代の地方官職」(『平安貴族の環境』至文堂、一九九一年)。
- (7) 橋本義彦「院官分国と知行国」(『平安貴族社会の研究』吉川弘文館、一九七六年)、五味文彦「院政期知行国の変遷と分布」(『院政期社会の研究』山川出版社、一九八四年)、玉井力「受領巡任について」(『平安時代の貴族と天皇』岩波書店、二〇〇〇年)、寺内浩 a「知行国制の成立」、b「院政期における家司受領と院司受領」(『受領制の研究』塙書房、二〇〇四年)、上島亨「国司制度の変質と知行国制の展開」(『日本中世社会の形成と王権』名古屋大学出版会、二〇一〇年)など。なお、子息の受領任用については、『中右記』天永二年七月二十九日条に宗忠自身の二男宗成が臨時除目で因幡守になった時、「近代公卿子族被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>受領<sub>一</sub>、皆可<sub>レ</sub>然<sub>二</sub>之人也<sub>一</sub>。誠朝恩之

深也」と述べている〔『殿暦』永久二年六月十九日条には因幡国は「別当（宗忠のこと）之沙汰也」と記される〕。

- (8) 田淵義樹「平安末期の伊賀国衙」〔『九州史学』一一〇、一九九四年〕、拙稿 a 「伊賀国における在庁官人の動向と平氏の進出」〔『東洋大学大学院紀要』五三、二〇一七年〕、b 「将門の乱と藤原秀郷」〔『東洋大学文学部紀要』史学科篇三六、二〇一一年〕。

- (9) 元木泰雄『河内源氏』（中央公論新社、二〇一一年）、野口実『源氏と坂東武士』（吉川弘文館、二〇〇七年）など。なお、拙稿「源頼信と河内源氏の展開過程」〔『東洋大学文学部紀要』史学科篇三九、二〇一四年〕も参照。

- (10) 03の割書内を「作手」と読むべきことについては、安原註(3)論文二六頁を参照。山本・瀬戸註(3)論文は87を「公□〔號カ〕事」と判読するが、写真版を熟覧の上、私案を掲げた。

- (11) 早川庄八「史料紹介時範記」〔『日本古代の文書と典籍』吉川弘文館、一九九七年〕。神拝については、土田直鎮「国司の神拝」〔『奈良平安時代史研究』吉川弘文館、一九九二年〕を参照。

- (12) 寺内註(7) a 論文はこうした年少者の任命を少年受領という範疇で一覧表にしており、知行国の弁別の指標になることを指摘している。なお、五味文彦 a 「文士と諸道の世界」〔『書物の中世史』みずす書房、二〇〇三年〕、b 「朝野群載」と『政途簡要集』〔『中世社会史料論』校倉書房、二〇〇六年〕によ

ると、三善為康は藤原為房や為隆の援助を得て、彼らの手元にあった文書を利用して永久四年に『朝野群載』を著したといい（為隆の往生の様子は『後拾遺往生伝』に描かれており、親密な関係にあったことが窺われる）、その実績を評価されて、以後、藤原長実などの公卿に仕えるようになり、さらに多くの文書を収録することが可能になったとされている。

- (13) 安原註(3)論文二四頁は発給時期を国守補任の正月十九日から加賀国で勸農の季節が始まる三月後半以前、三月前半までの間に比定し、現地側との一定の交渉を経て具合的な項目を作成したとすると、二月～三月前半頃と見なすのがよいとする。これは表1の加賀国関係文書のうち、日付の判明する最初が三月十五日であり、その頃までには目代が着国していたことと合致しているよう。

- (14) 註(1) b 拙稿。なお、在京雑掌の諮問例としては、『平安遺文』二五二五号天養元年（一一四四）三月二十九日太政官符案〔伊賀国〕、『勘仲記』弘安十年（一二八七）七月十三日条所載嘉承三年（一一〇八）八月三日太政官符〔紀伊国〕などを参照。

- (15) 『今昔物語集』のこの目代はもと傀儡子であり、かつての仲間たちが国府を訪れた時に、傀儡子の歌舞に参加したので、前身が暴露されてしまうが、「其ノ後ハ、館ノ人モ国ノ人モ、傀儡子目代トナム付テ咲ケル。少シ思エ下ニケレドモ、守糸惜ガリテ、尚仕ヒケリ」であったといい、上掲「国務条々」第十八条の目代の要件に合致していると思われる。

- (16) 安原註(3) 論文。三六―三七頁では国除目は四月上旬後半頃に実施されたと見ている。なお、国司が随従者に田地を付託する例は十世紀後半の清胤王書状(『平安遺文』二九〇、二九八号)や尾張国郡司百姓等解文(三三九号)にも知られ、清胤王の事例については註(1) b 拙稿を参照。
- (17) 安原註(3) 論文三四頁は、卜部兼仲は待賢門院の侍で、『長秋記』大治四年(一一二九)五月二十五日条に「非<sub>二</sub>受領<sub>一</sub>、非<sub>二</sub>院司<sub>一</sub>」の兼仲が「実募<sub>二</sub>女院御判<sub>一</sub>、非理多補<sub>二</sub>諸社司<sub>一</sub>、犯<sub>二</sub>用神物<sub>一</sub>」とあり、それを保証したのが閑院流の知行国内諸社への補任権と目され、前司である藤原季成の任中に国内神社社司に補任されていたと考えられるとされる。
- (18) 註(1) b 拙稿。
- (19) 安原註(3) 論文二六頁。
- (20) 安原註(3) 論文二九頁。
- (21) 日吉神人の活動については、戸田芳実「荘園体制確立期の宗教的民衆運動」(註(3) 書)、浅香年木「内乱前後の反権門闘争と白山宮」(『治承・寿永の内乱論序説』法政大学出版局、一九八一年)などを参照。なお、伊賀国の東大寺領黒田荘をめぐる動向については、石母田正「中世的世界の形成」(『岩波書店、一九八五年)、川島茂裕「寛徳庄園整理令と天喜事件」(『日本史研究』二二七、一九八一年)、久保田和彦「黒田荘出作・新荘の成立過程と国司政策」(『ヒストリア』一二八、一九九〇年)、正木育美「院政期における伊賀国黒田荘の拡大と負名」(『ヒストリア』二二三、二〇一〇年)、守田逸人「東大寺領玉滝荘の成立過程と地方支配」(『日本中世社会成立史論』校倉書房、二〇一〇年)などを参照。
- (22) 戸田註(3) 論文九五頁は、熊坂御庄は後に八条院領として見えるもので、この時点では白河または鳥羽の院領荘園かとする。
- (23) 浅香年木 a 「古代における手取扇状地の開発」(『古代地域史の研究』法政大学出版局、一九七八年)、b 「北陸道の在地領主層」(註(21) 書)などを参照。
- (24) 浅香年木「義仲軍団と北陸道の「兵僧連合」」(註(21) 書)。
- (25) 峰岸純夫「治承・寿永内乱期における在庁官人の「介」」(『中世東国史の研究』東京大学出版会、一九八四年)。
- (26) 高橋昌明「清盛以前」(平凡社、一九八四年)。
- (27) 『今昔物語集』卷二十九第六話「放免共、為強盗入人家被補語」には「家ハ上辺ニナム住ケル。若カリケル時ヨリ受領ニ付テ、国々ニ行クラ役トシテ有ケレバ、便漸ク出来テ、万ヅ叶テ家モ豊ニ従者モ多ク、知ル所ナドモ儲テゾ有ケル」者が下衆男の通報により家に強盗が入ることを事前に知った時、「親ク年来知タリケル□ノ□と云フ兵ノ許ニ行テ、蜜ニ此ノ事ヲ云ケレバ、□聞キ驚テ、深ク契有ケル人ニテ、□郎等トモ無ク、雑色トモ無ク、兵ノ道ニ達レル者共五十人許ヲ、明日ノ夕ニ窃ニ遣ラム」ト云ケレバ」という助力で撃退・追捕する話がある。
- 『朝野群載』卷二十二「国務条々」や『新猿楽記』四郎君条に

よると、受領郎等には様々な能力を持つ人々が必要とされたので、文士と武士の人脈形成の場にもなり、この話の人物はそうした所縁を活用することができたものと考えられる。こうした動向については、五味註(3) b書を参照。

(28) 戸田註(3) 論文九七〜九八頁。

(29) 大津註(6) 論文は、『小右記』寛仁二年四月五日条に見える伊予守源頼光の目代五倫朝臣が『今昔物語集』卷二十八第二十七話の伊豆守小野五友に他ならないことを指摘しており、受領経験者や受領予備軍が受領の國務遂行を支えた様子が窺われる。

(30) 目代にいくつかの種類があることは、泉谷康夫「平安時代における国衙機構の変化」(『日本中世社会成立史の研究』高科書店、一九九二年)を参照。

(31) 瀬戸註(3) a論文五〇〜五一頁。

(32) 山本・瀬戸註(3) 論文は、左兵衛督殿を前知行国主藤原実能、権弁殿を新知行国主藤原顕頼に比定する。五味註(3) b書八四頁は、充所が「善大夫殿」となっているのは、引き続いて越中目代を務めるのであるが、形としては前司の目代を退任し、この時点ではまだ新司に正式に目代として任命されていなかったもので、この呼称になったと見ている。なお、五味註(3) a論文一八九頁は、前司の名前を嶋里と判読するが、写真版を熟覧すると、時里と読めるようにも思われ、将里、嶋里、時里のどれが正しいかは後考を俟ちたい。

(33) 宮崎康充「国司の赴任とその儀礼」(『平安文学と隣接諸学』七、竹林舎、二〇〇九年)、渡邊誠「大宰府の「唐坊」と地名の「トウボウ」」(『平安時代貿易管理制度史の研究』思文閣出版、二〇一二年)三二八〜三二九頁など。『続左丞抄』永保元年(一〇八二)六月二十七日若狭守藤原通宗解には、「去承暦元年十月三日拜<sub>二</sub>任周防守<sub>一</sub>、為<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>進發<sub>一</sub>、且遣<sub>二</sub>前使<sub>一</sub>之处、前司源朝臣顕仲目代、前使未<sub>二</sub>到着<sub>一</sub>之以前、恣行<sub>二</sub>檢田收納務<sub>一</sub>、徴<sub>二</sub>納当年<sub>一</sub>□□、皆悉隨身上道既畢」という事態が記されており、前使を早期に送り込む意味合いが窺われる。

(34) 『絵師草紙』の読解については、五味文彦『絵巻で読む中世』(筑摩書房、一九九四年)を参照。

(35) 『玉葉』治承五年(一一八一)七月一日条に「城太郎助永弟助職、国人号<sub>二</sub>白川御館<sub>一</sub>」とあり、治承・寿永内乱期に活躍する越後城氏(平氏)の助職(長茂・資茂とも)の兄に助永という者がいたことが知られ、彼は『山槐記』除目部類仁平三年(一一五三)正月二十二日条に「使宣旨平助永」、『兵範記』同年七月二十五日条に「檢非違使正六位上行左衛門少尉平朝臣助永」と見えるので、在京して檢非違使として朝廷に奉仕しており、兄弟で役割を分担していたと考えられる。この城氏の助永とこの平助永の關係は不明であるが、参考までに城助永の存在を述べてみた。

(36) 『朝野群載』を編纂した三善為康は越中国射水郡の射水氏出身である(『本朝新修往生伝』)。「祇園社記」所収久安三年

(一四七) 正月十五日留守所下文の日下には惣大判官代に射水宿禰姓が見え、この氏は国府所在の射水郡を拠点とし、伊弉頭国造の系譜を引く譜第郡領氏族射水臣以来の勢威を有するもので、為康もその一員であったと思われる。本文書群を残した三善某と為康の関係は不詳で、論拠はないが、三善某が越中目代を留任となったのは、あるいは当地の同族とのつながりがあったためとも考えられ、憶言を記しておくことにしたい。

- (37) 戸田芳実『中右記』(そして、一九七九年) 一五一頁、一九九〇二二頁を参照。

- (38) 大津註(6) 論文、川尻秋生「保安元年「摂津国帳簿群」の性格」(『古代文化』六二の一、二〇一〇年)、宮本晋平「鎌倉期公家知行国の国務運営」(『史林』八七の五、二〇〇四年)、黒板伸夫「藤原行成の「給二千石」」(『日本歴史』五一八、一九九一年)、註(1) b・註(9) 拙稿など。

- (39) 戸田註(3) 論文九〇〇九三頁。

- (40) 浅香註(21) 論文。

- (41) 平川南「出土文字資料からみた加茂遺跡の歴史的意義」(『加茂遺跡』1、津幡町教育委員会、二〇一〇年)、拙稿「木簡から見た郡符と田領」(『地方木簡と郡家の機構』同成社、二〇〇九年) など。『万葉集』卷十八一四〇七三〇七五(勝宝元年三月十五日カ)には越前国(この段階では加賀国は越前国に含まれていた)掾伴池主が越中守大伴家持に「以今月

十四日、到<sub>二</sub>来深見村<sub>一</sub>、望<sub>二</sub>拜彼北方<sub>一</sub>」と述べており、四一三二・三三(同年十二月十五日カ)にも「依<sub>二</sub>迎<sub>一</sub>使<sub>上</sub>、今月十五日、到<sub>二</sub>来部下加賀郡境<sub>一</sub>、面蔭<sub>二</sub>見射水之郷<sub>一</sub>、恋緒結<sub>二</sub>深海村<sub>一</sub>」とある。

- (42) 目代の権能については、吉永註(3) 論文、「留守所目代に関する基礎的考察」(『古代文化』六八の二、二〇一六年)などを参照。

- (43) 「官史補任」(続群書類従完成会、一九九八年)によると、天仁元年(一一〇八)〜天永二年(一一一一)に六位史として見え、右少史から左大史に昇進している。『中右記』天永二年八月二十四日条に賀陽院行幸の準備に関連して、「次相<sub>二</sub>牽右中弁<sub>一</sub>・左大史宗遠并陰陽寮官掌・史生等<sub>一</sub>、参<sub>二</sub>賀陽院<sub>一</sub>」とある。

- (44) 五味註(3) a 論文一九六頁。

- (45) 『史料綜覧』によると、大治四年十一月には興福寺の僧徒による毆傷事件が起きているが、延暦寺関係では目立った紛擾は見られない。

- (46) 五味註(3) b 書八七頁は、「悪人に善を勧める、つまり勧進することだろうから、善は作善のことだろう」とするが、この事項の内容理解の可否は保留しておきたい。

- (47) 岩田慎平「小鹿島橘氏の治承・寿永内乱」(『紫苑』八、二〇一〇年)、註(1) d 拙稿。

- (48) 『香川県史』第八巻資料編古代・中世(一九八六年) 九八一〜



九八三頁。

- (49) 相模前司の人物比定・源有兼の動向は、五味註(3) a 論文一九四頁を参照。

- (50) 安原註(3) 論文二九〇三三頁。

- (51) 浅香註(23) a 論文二五九〇二六二頁。

- (52) 安原註(3) 論文三七〇三八頁。二九頁では「国務雜事」63「序並郡司申請事」が交易物を中心に雑役が並んでいる項目の中にあるのは、国衙領の雑役徴収に関する問題があったことを窺わせると述べている。

- (53) 註(1) g 拙稿。

- (54) 浅香註(23) b 論文「義仲軍団崩壊後の北陸道」(註(21)書)。  
財(財部)氏は江野財臣(古事記)孝元段、財造(大日本古文書)一一四三七)に比定され、その動向については、浅香年木「能美古墳群と在地首長層」(註(23)書)を参照。

- (55) 安原註(3) 論文三八〇三九頁。

- (56) 戸田註(3) 論文九六〇九八頁は庁官知貞を院庁の庁官と見る。なお、「遷替所」が前司を指す類例は、『平安遺文』二九六号(康保三年カ)八月三日清胤王書状に「謹上遷替院侍主達御中」とあるのが参照される(同書状群には二九四号に「謹上前周防前司御館侍主達」と見える)。

- (57) 網丁のあり方については、拙稿「郡雑任と郡務の遂行」(註(41)書)を参照。

- (58) 註(1) a 拙稿を参照。

- (59) 奥田勲「高山寺古往来をめぐって」(『高山寺古往来・表白集』東京大学出版会、一九七二年)。

- (60) 国衙による武者の掌握については、石井進「中世成立期軍制研究の一視点」(『史学雑誌』七八の一二、一九六九年)、戸田芳実「国衙軍制の形成過程」(註(3)書)、下向井龍彦「国衙と武士」(『岩波講座日本通史』六、岩波書店、一九九五年)、拙稿「刀伊の入寇と西国武者の展開」(『東洋大学文学部紀要』史学科篇三四、二〇〇九年)などを参照。

- (61) 註(1) a・c 拙稿。

- (62) 註(1) c・d 拙稿。

- (63) 註(1) e・(9) 拙稿など。

- (64) 註(1) f 拙稿、「在庁官人と中央出仕」(『海南史学』五二、二〇一四年)。なお、森田悌「受領」(教育社、一九七八年)二〇三頁では「長暦二年(一〇三九)のころ参河国の国侍たちが守源経相の京都宅へ出仕していたことが知られている」と述べられている。しかし、『春記』長暦三年十月七日条には「又云、関白殿御使申下可遣国<sub>レ</sub>之由、示北方、是為<sub>二</sub>国人<sub>一</sub>戒<sub>二</sub>傍輩<sub>一</sub>也。至<sub>二</sub>于物実<sub>一</sub>均分子孫之事、不<sub>レ</sub>可思懸<sub>二</sub>歟<sub>一</sub>。彼国宿人等并国侍等、過<sub>二</sub>葬送<sub>一</sub>可<sub>二</sub>下向<sub>一</sub>之由陳<sub>レ</sub>之云、為資、奉則等妻在<sub>二</sub>彼国<sub>一</sub>、又咸円等同在<sub>二</sub>彼国<sub>一</sub>、定迷<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>乎歟云々。為資、奉則其身<sub>レ</sub>在京、愁悶無<sub>レ</sub>極云々。尤道理也。愚者之後事、子孫・從者迷乱、是常事也」とあり、この時点で国侍が京宅に出仕していたとは必ずしも読めないと思われる。

またたとえ京宅にいたとしても、恒常的な出仕か否かは判断

し兼ねるところがある。ちなみに、服藤早苗「摂関期における受領の家と家族形態」(『家成立史の研究』校倉書房、

一九九一年)では、十月十五日条によると、奉則は京倉の管理を担当し、結解作成に与っていたことが知られるので、為資・奉則が七日条の「国宿人」であると見ている。そうすると、

七日条引用文の末尾に「子孫・従者迷乱」とあるので、「国宿人」

は従者＝受領郎等であり、妻を随伴して参河国に下向していたと解することができる。「国宿人」は国舎人のような上番者

ではなく、受領の死去に伴って地方から一時的に上京して宿泊している者の謂であり、国侍も同様の状況であったと目される(したがって「過」葬送「可」下向」となる)。ただ、戸田

註(60)論文一三三頁は、「宿人等」を参河国から国司京宅に宿直役で上番していた兵士(国役としての兵士役)、「国侍」

は一般宿直兵士よりも国司との臣属関係の強い存在と見ており、国侍の淵源についてはさらに検討すべき課題としたい。

野口註(9)書、川合康『鎌倉幕府成立史の研究』(校倉書房、二〇〇四年)など。

(66) 元木泰雄「源義朝論」(『古代文化』五四の六、二〇〇二年)、

(9) 書など。

(67) 石井進「院政時代」(『講座日本史』二、東京大学出版会、一九七〇年)、五味文彦「院支配の基盤と中世国家」(註(7)書、田中稔「院政と治承・寿永の乱」(『鎌倉幕府御家人制度

の研究」吉川弘文館、一九九一年)など。

(68) 内山俊身「東国武士団と都鄙の文化交流」、江田郁夫「下野宇都宮氏と在京」、長村祥知 a「在京を継続した東国武士」(以上、

『実像の中世武士団』高志書房、二〇一〇年)、b「治承・寿永内乱期の在京武士」(『立命館文学』六二四、二〇一二年)、

岡田精一「畠山重忠―実像と虚像」(『秩父平氏の盛衰』勉誠

出版、二〇一二年)、野口実「東国武士と京都」(同成社、二〇一五年)など。